呼ばれしは『虚無』を冠する使い魔

道化師クラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呼ばれしは『虚無』を冠する使い魔

【Ｎコード】
Ｎ９４６１Ｋ

【作者名】
道化師クラウン

【あらすじ】
死闘の末力尽きたウルキオラは何の因果かハルケギニアの大地を踏むことに！心について少しだけ分かってきたウルキオラは新たな地で何を思いながら力を奮うか？

序章　転界（前書き）

この作品はウルキオラがゼロ使の世界に召喚されたという二次創作で、最強で、お気に入りキャラ（多数も有）とくっつけようという色々と染まってる小説ですw
出だしを見たり内容を見て「あぁ、こりゃ合わないな」って思ったら他の作者様の作品を見に行くことをお勧めします。
自分も様々なサイトや作者様の作品を見ているので似ている位は楽しむための必要悪と思ってくれると良いのですが「まるっきりパクリじゃね？」とか思いましたらその人のペンネームや作品、サイトを教えてください、確認ののち速やかに永久封印いたしますので（^__^;）

序章　転界

そこでは今、二人の獣がお互いの雌雄を決するための死闘の幕が降りようとしていた。

片方は異形な仮面を付けて胸に穴が空いている。その手には黒い刀を携え、異形の仮面から生えた二本の角からは虚閃（セロ）と呼ばれる閃光を相手に放とうとしている。

もう一人、その身はまるで物語の中で見られる悪魔が如き姿でこちらの胸にも穴が空いている。

何故幕が降りようとしているのかというと、悪魔の方が仮面をつけた方に顔を踏みつけられて虚閃を放たれようとしていた

「成程な、容赦はなしか…虚（ホロウ）らしいことだ。貴様に敗北した俺に最早意味などありはしない…やれ」

轟！！！！！！

瞬間、仮面の男から巨大な閃光が放たれた。悪魔はその閃光を受け、その下半身と左腕を失った。

そのまま仮面の男は悪魔を地に放り、黒い刀で止めを刺そうとするが、そばにいた白い眼鏡の男にその腕を掴まれた。

悪魔はこの時、疑問が浮かびました

（…何故この男は止めるのだ？この俺の超速再生は先の時にその眼で確認していたはず…例えそれにも限界があるとはいえ、この場合見た目の現状は外視して原形が残っている以上トドメを刺すという

黒崎一護の行為は最良の選択だ、それともそれが人というものなのか？心というものなのか？…理解しがたい）

その後止めようとした白い男を仮面の男…黒崎一護は何を血迷っていたのか、持っていた黒い刀を白い男の腹部目掛けて投げつけた。

（味方に攻撃とは、今までの黒崎一護の行動原理からは随分とかけ離れているように見えるな…理性でなく本能で動いているのか？何にしても注意が逸れている今が好機だな）

悪魔は超速再生で下半身だけでも回復させようとしました。しかし、ダメージが大きすぎるからでしょうか？完全に回復することは無く、左足は日立ちしたミイラ位にしか復元していないようです。

（くっ、やはりこの程度しか戻らんか…相当力も削られたし、おそらく機会は一度あるかないか…！…虚閃を放つのか、好都合だな、あの制御している角を切り落とせば暴発する！）

そう決断した悪魔は、黒崎一護が力を溜めた虚閃を放つかどうかというタイミングで、残った右手に雷霆の槍（ランサ・デル・レランパーゴ）を作り出し、仮面に付いた角を切り落とした。

結果、黒崎一護の虚閃は暴発し、その爆発により仮面を剥がすことに成功した。

（…腕も脚も体も再生しつつあるが見せかけだけだ。奴が吹き飛ばした内臓まで戻ることは無い…今の一撃で終わらなければ、そこで死んでいたのは俺だ…奴は肉体を持った人間だ、何故かは分からんが胸に孔が空けられ、仮面も砕けた以上奴は死ん！）

その時、黒崎一護の体に浮き出ていた模様や長くなった髪が消え、それらが不可思議な渦を巻きだし、黒崎一護の胸に空いた孔に吸い込まれるように入り込むと、孔は綺麗に塞がっていた。

「超速……再生か！」

悪魔はあり得ないと思ったと同時に黒崎一護ならとどこか納得していた。超速再生は本来虚が持つ力の一つであり、人間や死神が使えるものではないが、先ほどまでの奴は確実に自分たち虚の側に近かった…しかし何より「…しぶとい奴だ…」そう思い、つい声に出すと黒崎一護はこちらを振り返って俺の名前を…丸で自分の犯した罪を再確認するかのように呟いた。

「…ウルキオラ…」

その眼には先ほどまであれだけの暴虐をした者とは思えないほどの戸惑いが見て取れた。

兎にも角にもこの体、先ほどの猛攻と無理な雷霆の槍での攻撃で既に限界は超えている…ならば俺が今出来ることは…俺は白い男の腹部に刺さっている奴の刀を抜くと黒崎一護のそばに投げ刺した。

「取れ、勝負をつけるぞ」

「…石田を刺したのは……俺か…？」

…石田？刺したと言っていることからこの白い男のことか？

「知ったことか」

「てめえの左腕と左脚を……切り落としたのも俺か…？」

俺はその問いには答えなかった、ただただ…奴の目を見返した。

「だったら俺の左腕と左脚を切れ「黒崎君！！」」

俺はこの時、どんな顔をしていただろうか？恐らく珍しく呆気に取られるという…驚きという感情が浮かんでいたのではないだろうか？

「さっきまでてめえと戦ってたのは虚化して意識の消えた俺だ！あれは俺じゃねぇ…勝負を付けるなら、今のてめえと同じ状態にならなきゃ対等じゃねえだろ…！」

俺たちがやっているのは戦いであり…戦争であり…殺し合いだ……何故こいつは自らの優位を棒に振ろうとする？今だにこいつは対等でも俺に勝てると思ってるのか？…まぁ、何にしろ

「……良いだろう、それが望みならそうしてやる」

ザァッ――――――！！！！！！

しかし、どうやら時間切れのようだ、俺の体が残っていた右の翼の先の方から砂になるように崩れだした

「…ちっ……ここまでか…殺せ」

別段何がしたかったわけでも無かった、俺には生まれた時から力は有っても空虚で…何もなかった

「早くしろ、俺はもう歩く力も残ってはいない…今切らなければ勝

負は永遠に付かなくなるぞ」

だからこそ、一時は消える時くらい気に入った奴に消されたいとも思った

「…断る」

なのに

「……何だと？」

何で

「…嫌だって言ってんだ！」

こいつは

「こんな…」

敵である俺に…さっきまで戦ってた俺に対して…

「こんな勝ち方があるかよ！！！」

こんなにも…嘆き悲しんでいる眼が出来るんだ？

「…ちっ…最後まで…思い通りにならん奴だ……」

そう言って俺は、俺が捕えてきた女の方に顔を向けた。

「…ようやくお前たちに…少し興味が出てきたところだったんだが

な」

こいつも俺に…ここまで連れてきた俺に…そんな悲しげな眼を向けるのか？

俺は何気なく女に向けて手を伸ばしてみた…そうすれば、何かに手が届くような気がして

「俺が怖いか？…女」

そして女は躊躇せずに答えた

「こわくないよ」

「…そうか」

心とは何だ？

それは何だ？

その胸を引き裂けばその中に視えるのか？

その頭蓋を砕けばその中に視えるのか？

貴様人間は容易くそれを口にする…まるでそこにあるかのように…視えているかのように

そうか…これがそうか…この掌にあるものが

心か

この死闘の末、異形の仮面を付けた男黒崎一護は勝利を収め、次の戦いの舞台に向かうのでした…しかし、この物語の主演は勝利を勝ち取った黒崎一護ではなく、消えるはずだった…もう一人の御仁から始まる物語なのです。

誰もいなくなった天蓋の上、そこでは誰にも知られず独りでに中に鏡が現れました。その鏡はどういう原理か、灰となったウルキオラ・シファーを区別し吸い上げると、そこには元々何もなかったかのように消え去りました。

序章　転界（後書き）

モバでも載せてたことがありますがこちらでは初です。
久しぶりの作品制作でところどころおかしなところがあるとも思いますが、その辺は個性やリハビリと思って生温かい目で見守ってやってください；；
非難中傷はやめてほしいですがああしたらいい、こうしたらよくなる、ココは駄目といった指摘のようなものは道化師も嬉しいのでどしどし受け付けます＾＾

第一章　召喚

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！」

その日、ここハルケギニアではサモン・サーヴァントと言われている使い魔召喚の儀が行われていた。
進級する生徒達が使い魔を召喚、契約し、自身の魔法属性と専門課程を決める重要な儀式である。

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！私は心より求め、訴えるわ！」

周りの生徒を見ると、どの生徒の近くにも何かしらの生物の存在が見られる辺り、どうやら今、呪文を唱えている桃色髪の少女が最後のようだ。

「我が導きに、応えなさい！！！」

ドカーン！！

しかし、彼女が唱えて杖を振るってもそこに生物の存在は確認することが出来ず、代わりに大きな爆発が起きるだけだった．（良く見ると他にも爆破跡がある、どうやら一度目ではなく何度も挑戦しているようだ）

「流石はゼロのルイズだな！」

「公爵家なのにサモン・サーヴァントすらまともに出来ませんのねw」

「けほっけほっ…全く、ゼロのルイズはほんと何をやらしてもゼロですわね」

「これじゃあ賭けにならないな…」

桃色髪の少女…ルイズは歯を噛み締めながら爆発跡を睨みつけていた。確かに周りからの罵倒罵言はムカツク…しかし、何よりムカツクのはサモン・サーヴァントの一つすら出来ない自分自身だ。公爵家の三女たるもの魔法の一つも出来ず、周りから付いたあだ名は何も持たないゼロの二文字、みなが出来ているサモン・サーヴァントすら出来なければ自分は本当に何も無くなってしまう…そんな強迫観念にルイズは襲われていた

（そんなの嫌！私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールで公爵家の者よ、絶対に皆をあっっと言わせるような使い魔を召喚して見せるんだから！！）

そう心に強く秘めてルイズは再び呪文を唱えた

「わが名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール！！…（省略）…我が呼び掛けに答えなさい！！！」

ドガッ！！！！

また爆発が起きた…今までで一番大きな爆発だ

（くっ！また失敗なの？！？！）

そうルイズが思ったその時…煙を巻き込んで風の渦が煙の中心付近で起こった。風の渦は徐々に狭まりルイズの前で収束し始めた

（あれ？何？何が起きてるの？？）

ルイズは自分の前で収束していく風と煙の渦に困惑していた。収束が終わったのか、風と煙が晴れるとそこには全身に白を基調とした服を纏い、腰に黒の帯を巻き、剣のような物を刺した男性が立っていた

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

気が付いたら自分は草原の上で立っていた。何を言っているか、自分でもおかしな言葉なのは分かるが本当に気が付いたらここにいたとしか言いようがなかった位には俺の記憶は飛んでいたのだろう

（おかしい…自分は確かにあの天蓋の上で黒崎と殺し合い、破れて塵となった…なのになぜ俺はこんなところにいる？ここはどこだ？虚夜宮（ラス・ノーチェス）でも虚圏（ウェコムンド）でも無いようだ…霊力ではないがそれとは違う何かがあるな…？…何だ？何故俺は（この霊力ではない何か）を取り込むことが出来る？しかもそれを力として使える……のか？…駄目だな、情報が少なすぎｒ「ちょっとあんた！聞いてるの！？！？」…何だ、このうるさい声は？）

そう思い視線を下げると桃色の髪をした少女が自分に向って何かを叫んでいるようだ

（桃色？…ザエルアポロの血縁？…嫌、そんなわけはないな、間抜けなことを考えた）
「誰だお前は？」
「だ、誰だとは失礼ね！！たかが平民が貴族にそんな口聞いて良いと思ってるの？！」
…良く分からんが、現地民がいるのなら今の状況を教えてもらうか
「そんなことはどうでも良い、ここがどこでお前が何なんで…ともかくここの情報を速やかに教えろ」
「な！き、貴族に対してその口の聞き方は！「まあまあ、ミス・ヴァリエール…ここは抑えてください」でもコルベール先生！こいつが…」
「お前は？」
「私ですか？私はこのトリスティン魔法学院で講師をしてるコルベールと言います。それとこの娘は「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ！あんたのご主人様の名前よ、しっっっかりとその胸に刻み込んでおきなさい！！」あはは…どうも、機嫌を損ねないでくださいね、それであなたは？」
ウルキオラは疑問に思った
（トリスティンは地名だとして…魔法だと？死神どもが使う鬼道のようなものか？それにこの女から発された言葉…御主人だと？俺がこいつの？どういうことだ？）
「ウルキオラ・シファーだ、それで魔ｈ「え？！シファーって…あ

んた貴族だったの?!」…どういうことだ?」

ウルキオラはコルベールの方を向いて言った（既にルイズとの会話は有益でないと切り捨てた）

「え?と…言いますと?」

コルベールも困惑していた、普通の平民かと思ったら貴族かもしれない事が分かったからだ

「何故シファーと名乗ると貴族扱いになるんだ?こう言っては何だが、俺はそんなものになった覚えは一度もない」

「…あぁ、もしかしたら習慣の問題かもしれませんね、ここハルケギニアでは名前だけで名字が続く者は貴族とされているのですよ」

「そうか、では次に魔法とは何だ?鬼道とかいうのとは違うのか?」

「鬼道…が何かは分かりませんが魔法とは私たち貴族の血を受け継ぐものが学ぶもので、詳しく言うとかなり長くなるのですが…聞きますか」

（確か従属官（フラシオン）の誰かが現世で魔法についての書物を拾ったと言って持ってきてたが…あれと同じようなものなら鬼道と指して違いは無いだろう）

「嫌、良い…ではこいつが俺の御主人だということだが一体どういうことだ?」

「そ、それはですね…「それはあんたをサモン・サーヴァントで召喚したのが私だからよ!さっきからコルベール先生とばかりだらだ

らぐだぐだと長話して…サモン・サーヴァントも知らない平民が主人である私をないがしろにするなんてどういうことよ?!」ミ、ミス・ヴァリエール、少し落ち着いて…」

またこの女かとウルキオラは嘆息していたが、今はやっと現状の聞きだしになったと思い、ここは息を飲むことにした

「…平民否々は置いといてサモン・サーヴァントとは何だ?」

「サモン・サーヴァントは…あぁ、もう!面倒ね後で纏めて質問に答えて上げるから今はこっちの言うことに従ってて頂戴!」

ウルキオラはしばし熟考し…「分かった」と言いながら少しだけ首を縦に振った

(少し前の俺ならこんな言葉だけの指示なんて受け付けなかっただろうが…黒崎に負けて消えたとき、

心について何か掴んだかも知れんがもう少し…人間を知っていくのも悪くは無いかもしれないな、その手始めがこんな女とは…面白いな)

ウルキオラはこの時、自分でも先の視えない、戦いの中でも強者に向かっていける人間の心を知ることが出来るかもしれないという喜びからか、自然と穏やかな笑みを浮かべていた。

ルイズはその笑みを正面から見ていた所為か、自然と頬が赤くなっていくのを自覚していた。

「(な、何なのよこいつ…無表情かと思ったらこんな顔も出来るのね///…って私は何を考えてるのよ?!相手はただの使い魔でしょ!!)じゃ、じゃあそのままじゃ届かないから少し屈んで頂戴!」

ウルキオラは頭に?マークを浮かべながらも、片足を折ってルイズ

に顔を向けた

「これで良いのか？」

「え、えぇ、そうよ…か、感謝しなさいよね！平民が本来貴族にこんなことしてもらえることなんてあり得ないんだから！」

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ！」

ルイズはウルキオラにコントラクト・サーヴァントの儀式を行うために口づけをした時、
ウルキオラの左手が輝き、使い魔のルーンが刻まれ始めた。同時に激しい頭痛と倦怠感がウルキオラを襲った。

「ぐっ、何だこの…な？！？！」

ウルキオラは左手で頭に手を置いた…しかし、そこにはあるはずべきものが無くなっていた。

「おい、これは確認だが、俺の左側の頭部…今俺が手を置いているところに仮面のような物は付いていないよな？」

「はぁ？あんた何言ってるの？そんなもの付いてるようには視えないわよ？それよりあんた私を呼ぶ時はちゃんと御主人さまと…」

その以降、俺の意識には完全にこいつの声は届いていなかった。破面（アランカル）である自分や虚には必ずと言っても良い仮面の名残が無くなっていたのだ。まさかと思い、俺は首の下辺りも触ってみた。そしたら

見事に孔が塞がっていたのだ。

「では御主人…お前には俺が……人間に視えるか？」

「御主人って付いただけで言葉使いとか変わってないじゃないのよ！はぁ…まぁ良いわ、おいおい直してい「良いから答えろ」（…怒）えぇ、そうね、どっからどう見てもあんたは使い物になりそうもないただの平民の人間ね！！！」

一体…俺の体には何が起きたんだ？

第一章　召喚（後書き）

はいはい、自分はシリアスとギャグの両方の好きな作者です。
ゆえにウルキオラ君には脳内補完の天然？ギャグと表面シリアスといった感じで動いてもらおうと思ってます。
何か真面目やクールキャラって脳内でどんな面白いこと考えてるかって思うと何だか色々ネタが浮かんできそうで（ー｜ー；）汗
ウルキオラっぽくないのや人間味が出てくるウルキオラ…作者にも最終的にはどこまで進化（退化？）していくか分かりませんw
それとすいません、本当なら後もう一話まで作る予定でしたが私生活の方の問題でこんな夜遅く？朝早くになってしまいました（；｜；）ネタ自体は大まかなイベントなどは作者の脳内で出来あがってるのですが時間や細かな部分で手こずりそうなのです。なるべく今日中にはあと1．2話は仕上げるつもりですので頑張ってみます（^｜^；）

第二章　仕事

ｓｉｄｅ　コッパ（コルベールです！）…コルベール

「ふむ、珍しいルーンですな」

私は今、ウルキオラ君の頭にやった左手を見ていた。そこには確かに何度かルーンを見てきた私でも直ぐに何かとは分からない位には珍しいルーンが刻まれており、私はそれをスケッチしようと本を取ろうとしたが、もう二つ気になることがあった。

それはウルキオラ君が手を置いた後の驚愕したような表情とその後のミス・ヴァリエールとの会話である。彼は自分のことを、まるで前は人間じゃなかったかのように言っているが、その姿は少し変わっているとはいえどこかの民族衣装と言われれば納得いく位のものである。そういった差別的な虐待を受けたとか、ただの妄想と片付けるには彼の眼は理性的な輝きに満ちているし言葉の受け答えも…まぁ口の聞き方は少し頂けませんでしたが、しっかりしたものではありましたね。

しかし、私が一番気になったのは彼の腰に刺してある剣の方ですね。その剣は見た目はどこにでもありそうな普通の剣ですが、中に内包されてる魔力が凄いわけでもないのに…いえ、だからこそ異質なのでしょう。魔力じゃない何かの存在がいることとその辺で見かける魔剣以上の禍々しさ…その程度のことが見て取れるくらいで、もっと詳しいことは調べてみないことには、出来れば是非調べさせてもらいたいものですね。

「っと、では失礼して…」

いけないいけない、今は仕事に集中しませんとね。

私は一応許可を取ろうとしたが、どうやらウルキオラ君も何かを深く考えているらしく手に触っても気づかれなかった…いえ、これは気づいてても無視して思考に没頭しているようですね。多分今私がウルキオラ君に危害を加えようとすれば反撃されるでしょうね。

「よし、これでいいでしょう…ではみなさん、いろいろありましたが儀式は終了です、各自解散してください！」

と生徒達に指示を出し、春の使い魔召喚の儀式は終了した。

ｓｉｄｅ　ルイズ

「ルイズ、お前も飛んでこいよ！」

「ゼロのルイズには無理だろ？」

「あなたみたいな人には平民がお似合いね！」

周りの生徒たちはそんな罵声を私に当てながらレビテーションで空を飛び、校舎の方に向かっていった

（何よあいつら、静かに飛んでいくこともできないわけ？あんなやつらでも魔法が使えるから貴族だなんて…良いわ！いつか絶対見返してやるんだから！！ともかく今はこいつね）

ルイズは罵声を言った奴らのことを頭の隅に追いやり、今は目の前にいる自分の使い魔に目をやった。

（背は私よりは大きくても男性としては平均的ってくらいかしら？一応剣は持ってるから心得くらいはあるんでしょうけど…こんな優

男じゃとても強そうには見えないわね、口の聞き方もなってないし…はあぁぁ、全く）

使い魔は何か考え事をしているのかずっと虚空を見ているだけだった。

「ちょっとあんた、いい加減考え事やめて私の話を聞きなさいよ！！」

「（やはり俺の体は記憶がなくなって塵となった後に何かがあったと考えれば…？）…何だ？何か用か？御主人」

そういうと使い魔は今気づいたかのような顔をして私の方に顔を向けた。本当に失礼なやつね！

「校舎の方に行くからさっさと付いてきなさい」

そう簡潔に言って私は使い魔の返答を待たずに校舎の方に向かった。

「分かった…時に御主人「何よ？」ここの人間はあんな風に誰でも空を飛べるのか？」

ウルキオラの記憶では、通常の人間は宙に浮くことさえできないはずだったが、ここの人間は先ほど感じた霊力とは違う力を行使出来るらしく、それを使って石造りの建物の方に向かっていたのだ。

「はぁ？あれは貴族が使う魔法だから出来るんであって普通の平民が使えるわけないでしょ？そんなことも知らないなんて一体どこの田舎者よあんたは」

「（ならやはり飛べる人間は特別ということか…あまり目立つのも性分ではないしな、寝静まった深夜に力が使えるかどうかの確認をするか）なるほど、分かった…お前は飛ばないのか？」

「（ヴッ！）うるさいわね！私は運動不足の改善も兼ねてるから良いのよ！」

「…そうか（飛べないのか？…まぁ良い、俺には関係ない）」

「ほら、さっさと行くわよ！」

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

あの後、俺はこの女…ルイズの後ろを付いていき、こいつの部屋に入ることになった。ルイズはベッドに腰掛け、俺は手近にあった椅子に座った。

「さて、とりあえず質問に答えてもらうが…先ず使い魔とこの手に付いた模様について教えろ」

「あ、あんたその言葉使いどうにかならないわけ？！私は貴族であんたのご主人様なのよ！」

「そんなものは知らん、良いから質問に答えろ」

「ぐぅ！…（我慢よルイズ、今こいつを爆破したら説明が明日以降に伸びちゃうわ）良いわ、じゃあ使い魔としての仕事を説明してあげるわ」

ルイズは杖に伸びそうな手を理性で抑えて何とかウルキオラを爆発

で吹き飛ばすことだけはしなかった。

「そういうことじゃなくてどうして俺がお前の使い魔なのかを「後でそれも説明するから黙ってなさい」…分かった」

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力が与えられるの！」

「何か見えたり聞けたりするのか？」

「まぁあんたも人間だからその辺には期待していないわ、それに私も何も見えないし」

「…じゃあ今の説明はいるのか？」

「まぁ一応覚えてなさい、使い魔の仕事には変わりないんだし」

「次に使い魔は主人の望む物を見つけてくるの。たとえば秘薬とか」

「俺は薬とかについては何も知らんが教えられたものなら取りに行ける」

「危険な場所とかは？火山とか崖の下とか」

「火山は入ったことがないから断言出来んが崖なら可能だろう（この体で火山は分からんが空を飛べれば崖は問題ないだろ）」

「本当かしら？あ、あと、使い魔は主人を守ること！これが一番重要！」

「守る…か」

そういえばあの時の黒崎はあの女を助けるために虚圏に来たと言っていたが…

「良いだろう、俺がお前を守ってやる」

俺もこの女を守っていけばあいつらのように心についてもっと知ることが出来るかもしれんな

「守ってやるってないよ！あ、あんたが私を守るのは使い魔何だから当然でしょう！」

「そうか…で、結局俺は何故お前の使い魔なんだ？」

「あんたは私のサモン・サーヴァント…召喚魔法に応じて現れたんでしょ？まぁ本来は鏡を通ってくるみたいなんだけどあんたはいきなり現れたって言っても間違いじゃないし私の目の前に出てきたんだから私の使い魔なのよ、それにコントラクト・サーヴァントで出来たそのルーンがなによりの証拠よ」

そういってルイズは俺の左手を指差した。

「ルーンとはこの模様のことか？鏡については記憶にないから分からんがそういうことなら…俺はどこかでお前の求めに応じたということか？」

「さぁ？ただ私はそういうものだって言われてきてることを言っただけだし…第一あんたみたいな平民を使い魔にしたって話も聞いたこと無いもの」

「なるほど…コントラクト・サーヴァントはあの時口を合す行為に何かしらの意味があったと思って良いのか？」

「あ、あれは、ルーンを付けるのに必要だっただけだから変な勘ぐりはしないでよね！！」

ルイズは顔を赤くしながら抗議の声を上げた

「（勘ぐり？…）ともかく大体のことは分かった、礼を言おう御主人、それでは俺は何をすれば良い？」

「い、嫌に聞きわけが良いじゃない…はぁぁ、何だか今日は色々疲れたわ、明日も早いし今日はもう寝るわ」

そう言ってルイズは寝巻に着替えるために制服を脱いでその制服をウルキオラに投げ渡した。

「それ、明日の朝に洗っておいて、後明日の朝ちゃんと起こしてちょうだいね！」

そういうとルイズは布団の中に入って睡眠を取る体制になった

「分かった…御主人「何よ」俺は少し外に出ていたいんだが良いか？」

「駄目よ、あんまり歩き回ると他の生徒に変なうわさが立つかもしれないでしょ？」

「しかし、周りの地理を知っておかなければいざという時困ることになるかもしれん、その前に色々と把握しておく必要がある」

「まぁそれなら良いんだけど…良い？絶対他の部屋や人の部屋何かと間違えたりしないでよね！私にまで迷惑がくるんだから…」

「分かっている、この部屋の場所は確認済みだから間違えたりはしない」

そういって俺は部屋の外に出た。

しばらく探索していると静かで大きな広場に出た。俺はちょうど良い場所だと思い、腰に下げてあった斬魄刀を抜いた。

「（しかし、この世界は根本的に違う世界のようだな、まさか月が二つもあるとはな）さて、今の俺がどのくらい動けるか…試してみるか」

俺はしばらくの間刀を振り続けた。どうやら肉体的な衰えや俊敏性、身体の以上は見られないが霊圧の変化…虚閃や虚弾（バラ）は収束する以前に溜めることが出来ないでいた

（この空気中の霊気に似た力はどうやら人間の肉体のままでは集めづらいようだな、本気で扱うことが出来るかどうか調べるには…やはり刀剣解放（レスレクシオン）するしかないか）

ウルキオラはそう考えを纏めると後ろの茂みに向けて「いつまでそこでのぞき見ているつもりだ」と言い放った。

少しすると、そこからは蒼い髪をして、自分の背丈と同じくらいの長さをした杖を携えた少女が現れた。

第二章　仕事（後書き）

いやぁやっとここまで掛けましたよ、ほんとだったらここまでは昨日のうちに終わらしておくはずでしたが…まぁしょうがなかったんですw

次回の投稿予定は明後日になるかな？明日はまたゼミの飲み会だし今日は正直飲み→大学→小説のコンボでまともに寝てません（ー｜ー；）汗気力もないので今日はここまでです。

第三章　雪風

ｓｉｄｅ　？？？

その光景に居合わせたのは本当にただの偶然と気まぐれの結果だった。

最初はただ、たまには外で本を読みたいと思って外に出て、良く一人で魔法の精度を上げる練習の場所として使っていた場所に向かっただけだったんだけど、どうやらそこには珍しく誰かがいるようだ。

気にせずに本を読もうと近づいた。どうやらそこにいるのはあのルイズが呼びだした使い魔だった。

何をしようとそこにいるのかは分からなかったが、「さて、今の俺がどのくらい動けるか…試してみるか」というと腰に刺していた剣を抜き、剣舞を始めだした。

最初は何かを確かめるように、一つ一つが目で視認できるほどの剣速や体捌きではあったのに（それでも一般の人からすれば十二分に早い剣速だが）徐々にその速度は増していき、最終的には剣は勿論のこと、体の動きですら視認するには困難なほどの速度になっていた。

数分たったかのか数十分たったのか…私は気づいたら茂みの裏に隠れてその剣舞をじっと眺めていた。

そして、使い魔は満足がいったのか剣舞を止め、腰に刺し直した後、

戸惑うことなくこちらに振り向き、「いつまでそこでのぞき見ているつもりだ」と言ってきた。

気づかれてた?!私は風系統のトライアングルメイジ、だから気配を消しての隠密や偵察には少し自信があったのだが、彼にはあまり意味のないことだったようだ。

…勘違いか何かで諦める様子も見られない、どうやら私が出るまで待っているようだ…仕方ない、それにのぞき見ていたのは私の方だ。

そう思い、私は観念して茂みから出て彼の前に姿を見せることにした。

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

「何故隠れて俺を見ていた?」

俺は今、隠れて様子を伺っていた少女に対して詰問していた。

どういった理由でのぞき見ていたのかは知らないが下手に他の人間に知られれば面倒なことになる。この世界の人間がどのくらいの能力を秘めているかは知らないが、向こうにいたころの人間と大して変りがなければ俺レベルの身体能力をした人間などいないはずだ、口封じはここで世話になる以上、更に面倒になる可能性がある以上する気がない、ならば理由如何によっては口止め程度はしておく必要があるな。

「隠れるつもりは無かった…ごめんなさい」

「では何故ここいいる?」

「ここにいる理由？私は本を読みに来ただけ」

そういうと少女は懐から本を一冊取りだした。

「（嘘はついてなさそうだな）そうか、分かった…」

俺はたまたま居合わせただけなら口止めするほどではないと思ったので、そのままルイズの部屋に戻ろうとした。「待って」

「…何だ？まだ何かあるのか？」

「あなたと手合わせがしたい」

「何だと？」

俺はその場で振り返り、少女の方を見た。

「あなたと戦えば得られるものが多そう…」

確かに先ほどの動きを見ていたのなら俺が相当な手だれだとは気付くだろう、しかし…

「断る、俺はお前に興味もなければ戦う気もない」

「…そう」

そう言って俺は再び踵を返ｓ「…エアハンマー」？！…突如、少女のいる方から詠唱らしきものが聞こえると同時に力のうねりが迫ってくるのを感じたので俺は素早く横に飛んで空気の固まりのようなものを避けた。

「何のつもりだ？」

「…理由」

…つまり俺と戦う理由を作ったということか？グリムジョー辺りなら嬉々として挑発に乗るだろうが…まぁ良い、俺もまだこの人間の身体について知りたいことはあったし、何より魔法に直に触れるには調度良い機会だ。

「良いだろう、そんなに痛い目に合いたいのであれば望み通りにしてやる」

俺は素早く間合いを詰めると拳で少女の腹部を殴り、奥の茂みの方まで吹き飛ばした。

ｓｉｄｅ　？？？

「かはっ！？」

見えなかった…良いわけのつもりはないけど、油断していたとはいえ全く動きの初動に気づくことが出来なかった。気づいたら私は拳を受けた勢いのまま茂みの中で蹲っていた。

「どうした？もう終わりか？」

彼は殴った方と思われる右腕を一度横に振り、ズボンに付いてるポケットに手を入れた。

余裕のつもりなのだろうか？それともこちらが仕掛けるのを待っているのだろうか？…どちらにしろこちらも攻撃しないと

「ウィンディ・アイシクル」

氷の槍を数個ほど作り出し、牽制のために打ち出した。彼はそれを薄皮一枚ほどの差でかわしながらこちらに接近してくる。剣で迎え撃つか回避するとは予測していたので私は冷静に術式を組んどいたエアハンマーを彼に向って放った。しかし、彼は風の固まりを意に介さず、拳で叩き潰すかのように上から腕を叩き付けた。流石に拳で叩き、風の固まりを打ち消すとは思わなかったので私は一瞬硬直した。その一瞬で私が次のウィンディ・アイシクルを唱える前に首を掴み上げられた。

「ぐ…くふぅ……」

「これでは詠唱も出来ないだろう…まだやるか？」

私はこの状況から抜け出す方法を模索したが、何一つ有効な手が思いつかなかったので首を振ることで抵抗の意思がない事を示した。(通常時での相手なら効きそうな手はいくつかは浮かんだが、ウルキオラ相手では全て防がれてしまうだろうし、ウルキオラに殺気がないと感じて、その方法を行使することはしなかった)

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

俺は少女の首から手を離した。

「で、もう良いのか？」

俺がそう聞くと少女は首を縦に振り、肯定の意を示した。

「そうか、なら俺はもう行くぞ」

俺はそう言ってその場を離れ（くいっくいっ）…させてくれないようだ

「まだ何かあるのか？」

そう聞くと少女は「タバサ…」と言ってきた…？

「何だ？」

「名前…」

これは…今のは少女の名前か？

「お前の名前か？」

「…（こくっ）」

「そうか…俺はウルキオラだ、もう行くがまだ何かあるか？」

「また今度、手合わせして」

そう聞いてきた。俺は少し考え…承諾することにした。先ほどの戦いのように得るもの、気づくものが出てくるかもしれないからな。そう、先の戦いで俺はこの世界の魔法というものと自分の体について知ることがいくつかあった。この世界の魔法というものはさっき見た空気の固まりと氷の槍を見る限り、いくつかの種類に分類できるのだろう、少なくとも空気のようなものと氷の二つのタイプがあ

ることが分かった。
体については鋼皮(イエロ)と呼ばれる破面の皮膚の有無が分かった。さっき氷の槍を避ける時に、自分の皮膚の表面を滑るように避けたことで俺の体に傷が出来るか確かめた。結果…鋼皮は条件付きではあるが存在していた。何もしてない状態で氷の槍を避けた時は皮膚に傷が付き、血が滲んでいたが、空気の固まりを殴った時に霊力を纏う要領で拳に力を込めたら傷一つ付くこと無く叩き潰すことが出来た。よって、また手合わせをすれば何か新しい事に気づけるかもしれないので、この誘いは俺にとっても渡りに船だ

「良いだろう、気が向いたら相手してやる」

「分かった…ありがとう」

「礼などいらん、ではまたな」

「うん…また」

そう言って俺はルイズの部屋に、タバサは自分の部屋に戻って行った。

第三章　雪風（後書き）

やっぱり自分は日常的な会話より戦闘やギャグ考える方が好きですね。
そろそろ本格的に卒論が始まることになるらしいのでこれからは１、２週に一回、土日休日のどこか、余裕があれば全部という感じにしたいと思います。
取りあえず今週はこの章で終わりです。　次は来週の５／１を理想とします。

第四章　朝食（前書き）

明日実家に帰ることになったので今日のうちに四章書き上げようと思います。

第四章　朝食

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

「ぅ…朝か」

あの後昨日、俺はルイズの部屋に戻っている辺りから眠気が出てきたので、部屋に戻るなり置いてある藁の上で寝ることにした。虚の時は気絶はしても睡眠などの欲求は霊体であったからか、全く無かった。

しかし、今は肉体がある所為で睡眠欲も有れば食欲もある。霊子を取り込むのと似た感覚だが、人間の肉体の場合、昨日食事を取っていないこともあり、今は自分の身体が栄養を欲していることが痛いほど理解できる。

ともかく今は日の光の刺激で目覚めることになったんだ、ルイズに頼まれた服の洗濯をするため、手近な籠に洗濯物を入れて窓から下へと降りて昨日のうちに確認しておいた洗濯場に向かった。

しばらく歩いて洗濯場に付くとそこには先客がいた、その見た目は昨日見た貴族という奴らと比べると随分違っており、どちらかと言うと使用人のような格好をしていた。

俺はそいつを無視「あの～、失礼ですが貴方は？見たところ学院の人ではないようですが」…出来なかった。どうやら見覚えのない俺に警戒心を持っているようだ、さっさと終わらせて戻ろうと思ったが仕方ない。

「ウルキオラ、昨日ここに呼ばれた者だ」

「ということは…もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔の方ですか？」

「あぁ、そういうことになっているな」

「そうでしたか…昨日から噂になっていますよ、平民の使い魔が召喚されたって」

「そうか」

俺はあえて下の名前を言わなかった、ここでは名字がある人間は貴族と名乗っているようだが、俺はそれについて説明するのが面倒なので、極力上の名前だけ名乗ることにした。

「あ！申し遅れましたが私シエスタと言います平民同士仲良くしていきましょうね」

「シエスタか、分かった」

「はい！」

その後シエスタに「髪が黒いって珍しいですよね、どこの出身ですか？」とか「今まではどこで何をしていたのですか？」とか返しづらい質問やどうでも良いような話を適当に返しながら洗濯物を洗っていき、殆どの洗濯物が終わった後、シエスタに別れを告げてその場を後にした。

部屋に戻るとルイズは今だにベットの中で惰眠を貪っていた。明日

起こせと言われていたので俺はルイズを起こすことにした。

「起きろ、御主人」

「うっ…うぅ～ん、むにゃむにゃ…」

「朝だぞ…起きろ御主人」

ユサユサ

「ん～？…Ｚｚｚ」

…起きそうにないな、と俺は布団を掴むと思いっきり引っ張ってルイズをベットから落とした。

「Ｚｚｚ…わきゃ？！？！な、何事？襲撃！？台風！？？そしてアンタダレ？！」

「いや、朝だ御主人それと貴様の使い魔だ」

「あっ…そうだったわね…って何でこんな起こし方するのよ！もっと普通に「とんとんと優しく叩いてでは到底起きそうになかったのでな、少し手荒く行かせてもらった」…で「他に方法をと聞くなら次から希望の起こし方を言ってくれ、次はそうやって起こすがそれでも起きなかったら今回と同じ方法を取る、遅刻は嫌なのだろう？」…もう良いわよ」

どうやら御主人も納得してくれたようだ、その後御主人は着替えさせてと言ってきたので俺は手早く着替えさせて外で待機することにした…何故か御主人が酷い敗北感を味わったような顔をしていたが

何だったんだ？

「まぁ、俺には関係…ん？」

隣のドアが開いて中から焔のように赤い長髪、褐色の肌をした女が出てきた。

「あら？あなたはどなたかしら？ここは女子寮で、そこはルイズの部屋のはずだけど？」

「…ウルキオラだ、俺はルイズの使い魔で、今は御主人の用意を待っている。」

「あぁ、あなたが例の平民の使い魔ね、私は隣の部屋に住んでいるキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ」

「ミス・ツェルプストーで良いのか？」

「ん～、何かしっくりこないわ、キュルケで良いわよ、後ミスもいらないわね」

「分かったキュルケ」

お互いの自己紹介が終わると、部屋の中から用意を終えたルイズが出てきた。

キュルケはルイズを見るとニヤリと笑うとさっきまで話してた時とは印象の違う話し方で話しかける。

「あら、おはようルイズ」

ルイズは顔をしかめ、露骨に嫌な感情をした。

「おはようキュルケ」

「昨日は大変だったわね～、でもよりによって平民を召喚しちゃうなんて…流石ゼロのルイズよねぇ」

ウルキオラは興味なさそうにポケットに手を入れて外を眺めている。

「う、うるさいわね！別にあんたには関係ないでしょ！」

「えぇ、関係は無いけどやっぱり平民を召喚するなんて珍しいじゃない…あら？でもよく見たら結構色男ね、見てるだけで燃え上がりそうだわ」

キュルケは熱い眼差しを「ちょ、ちょっと！何人の使い魔に色目使おうとしてるのよ、本当にツェルプストーの人間は見境ないわね」…向けようとしていたがルイズが止めた。

「あら？でも選んでる結果私たちツェルプストーに夫を取られてるのはどこの家だったかしらねぇ」

「くぅぅ！い、言わせておけば！」

このままでは暴力に出そうなので俺はルイズを止めることにした。

「御主人、朝からこんなところで騒いでては周りの部屋に迷惑が出

る。」

「あはは！使い魔の方がよっぽど出来てるわねぇ」

「離しなさいウルキオラ！一度こいつは吹き飛ばさないと気が済まないわ！」

そう言いながらルイズは懐の杖を使おうとするが、俺が腕を抑えているので引き抜けないでいた。

「それに使い魔にするならやっぱりこういうのじゃなきゃ、おいでフレイム～」

すると扉のところにいた赤トカゲがのっそりと歩んできた。

「これって…火蜥蜴（サラマンダー）？」

「そうよ～、サラマンダーよ～、見てこの立派な尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ！好事家に見せても値段なんて付けさせないわよ」

「サラマンダー…俺がいたところでも見たこと無い生物だな（生物の括りでだが）触れても良いか？」

「えぇ、よろしくてよ」

許可が出たので俺はサラマンダーの背中を撫でる。サラマンダーは気持ち良さそうに眼を細めた。

「ほんのり暖かいな、体温が高いのか？それとも体内に可燃性の物質生成が出来るからか？」

「へ～、理解が早いのね、サラマンダーは火を吐くこともできるから多分暖かいのはそのせいじゃないかしら？…どうルイズ？私の属性にピッタリでしょ」

「あんた火属性だもんね」

「えぇ、私の二つ名、“微熱”のキュルケはささやかに燃える情熱の微熱。でも、男の人はそれでイチコロなのよ。あなたと違ってね？」

そう言ってキュルケは俺らに意味ありげな視線を向けた。ルイズはその挑発に乗って今にも飛びかかりそうな雰囲気醸し出しているが、腕は俺に掴まれているので睨むだけに止まっている。
俺はここでのやり取りに飽きたし、いい加減腹も空いたのでルイズを誘導することにした。

「ルイズ、時間は良いのか」

「ぅ～～～っっ、分かってるわよッ！！」

ルイズは肩を怒らせ、黒縄天譴明王のごとくズンズンと音がする様に大股で廊下を歩いて行く。ウルキオラはその様子を見て、溜め息を吐く

「ハァ…それでは、失礼する」

ウルキオラはキュルケに一言掛けてから、ルイズの後を追う。

その場に残されたキュルケは、非常に愉快そうに笑っていた。

「うぅ～～～～～、何なのよあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！しかも、わざわざ人に見せつける為にわ待ち伏せまでして～～ッッ！！」

女子寮から出るや否や、溜めこんできた怒りを発散するように廊下を歩きながら誰にともなく叫び、両手でを頭を掻き始める。相当我慢していたようだ。

「随分、あのキュルケといった娘が気に入らないようだな？」

ウルキオラの問い掛けに、すさまじい形相で振り返るルイズ。その顔に、ウルキオラもつい驚きに身を固まらせてしまう

「当前よ！　あの女、キュルケはトリステインの人間じゃないの！隣国ゲルマニアの貴族よ！私はゲルマニアが大嫌いなの！私の実家があるヴァリエールの領地はね、ゲルマニアとの国境沿いにあって、戦争になるといっつも先頭切ってゲルマニアと戦ってきたわ！そして、国境の向こうの地名はツェルプストー！キュルケの生まれた土地よ！だから、戦争の度に殺し合ってるのよ！お互い殺し殺された一族の数は、もう数えきれないわ！！」

突然、ルイズは自分とキュルケ、双方の実家の確執、ゲルマニアとの確執の歴史を語り始めた。

そもそも帝政ゲルマニアとは、トリステインの北東にあるトリステ

インの１０倍ほどもある広大な国土を誇る大国である。魔法より冶金などの技術に優れており、ゲルマニア製の刀剣や防具などは他国で高い評価を受けている。
また、社会風習や政治制度もハルケギニアの他の国とは一線を画しており、金があればメイジではない平民であっても領地を買い取って貴族になることができる。

一方、トリステイン王国はハッキリ言って小国である。古い考えを尊ぶ風潮が強く、平民が貴族になる事は非常に稀だ。
そう言った国の在り方や考え方の相違から、お互いを快く思っていないらしい。
まあそれだけならば、虚の時に喰うか喰われるかの時代を生きたウルキオラも普通に納得したのだろうが

「それだけじゃないわ、ヴァリエール家はツェルプストーに耐えがたい辱めを受け続けてきたの！」

「耐えがたい辱め？」

「ヴァリエールのご先祖様たちは、ツェルプストーの一族に、自分の奥さんや恋人を寝取られ続けてきたのよ！！」

ズルッ！

ウルキオラは思わずこけそうになってしまった。どんな凄惨な確執かと思いきや、いきなり低レベルな話になった（そういえばさっきキュルケが夫がどうこうと言っていたな）

「あのキュルケの実家、ツェルプストー家はヴァリエールの領地を

治める貴族にとって不倶戴天の敵だってこと！だから、あの女に気を許しちゃダメよ！あの女にだけは絶っ対にダメ！！」

「ああ、分かった」

つまりはそれが言いたかったのだろう。黙って聞いていただけなのに、ウルキオラは非常に疲れたような気がした

「はぁ、何だか疲れたわ…早く朝食に行きましょう」

自分で興奮して、勝手に消耗してだるそうに歩いて行くルイズの背中を見ながら、ウルキオラは自分のこれからを考えてしまい、大きな溜め息を吐いてしまうのだった。

アルヴィーズの食堂と呼ばれる場所にウルキオラとルイズが入ると周りがざわつきだした。

ルイズはどこか、それを努めて無視している感じで歩みを進め、ウルキオラは雑音を少しうるさいと思ったくらいだが、その眼はテーブルの上の食事に向いていた。

「御主人、俺はどこで食事を取れば良い？」

「そこよ」

ルイズが示した場所は床に置かれたパンとスープ…しかし、席らしい座る場所は無かった

「…他に座る場所は無いのか？」

「し、仕方ないでしょ！　本当なら使い魔は外で食べる所を、あんたは私の厚意でここで食べることをゆるされてるんだから…」

「これじゃあ足りないし場所がな…御主人、俺は外で取らせてもらう」

「え？ちょ「まさかここで喰えとは言うまい、ここにしたのは俺が人だからという一応の配慮にもならない配慮だったんだろうが俺自体がここで空気がないし何より御主人は使い魔を見世物にするなんて低俗な趣味は持ち合わせていまい？」…わ、分かったわよ、確かにこの中で平民のあんたも一緒だと私への視線が多いし煩わしいものね」

「分かってくれて何よりだ、それではな御主人、食事が終わったころにまたここに来る」

そういってウルキオラは大食堂から出ていった。少し歩くと向かい側からシーツを大量に持ったシエスタを見かけた。俺は丁度良かったのでシエスタに声をかけた

ｓｉｄｅ　シエスタ

私は朝、洗濯場で会ったウルキオラさんと別れた後、貴族様達がいなくなった部屋でベットのシーツを掛け直して回ってました。仕事中ではありましたが、私は先ほど会ったウルキオラのことがどうにも気になってしまい、時々作業の手が止まっていました。

（それにしても変わった雰囲気の人でしたね、目や纏ってる雰囲気

は冷たくも感じるのにやってることは酷く庶民的で洗濯物って…出身はいきなり呼ばれてどのあたりだか分からなくて、何をしてたかと聞けばはぐらかされてしまいましたし…はぁ、私と同じ髪の色だしかっこいい人だからお友達になれたらなぁって思ったけど駄目だったのでしょうか）

そんなことを考えながらも私はいつも通りシーツを纏めて持っていっていましたが、向こう側から誰かに声を掛けられました。（シーツを顔の前に山が出来る位持っていたので確認する時は横に身体を向けないと確認は無理）

「シエスタか、丁度良かった、昼食の時に厨房の方で食事をしたいんだが、その話をそこの責任者のものに話を通しておいてくれないか？」

「マルトーさんにですか？あ、マルトーさんと言うのはここの料理長のことなんですが、その人の耳に通しておくことは出来ますが厨房の方で食事となるとたかだか一メイドではそこまでの許可は…」

「そうか、なら話は俺の方からするからシエスタは昼にこういう人が来ます程度の話をしといてくれるだけで良い」

「はい、それなら出来ますので分かりました。」

「礼を言う、後で何か困ったことがあれば聞こう」

「いえ、困ったときはお互い様ですから」

「そうか、では失礼する」

そういうとウルキオラさんは外に向かって歩き出した。よく見れば両手にご飯を持っているので外で食べるのでしょうか？そう考えるとわたしもまだ仕事中だったのを思い出して、シーツ置き場に向かった。

「…あ、腰の剣についても聞くつもりだったのにまた忘れてた。」

第四章　朝食（後書き）

眠い…何だか分からんが頭痛すぎてしかも眠いという最悪コンビが俺を襲ってくる；；明日実家帰るから大急ぎで仕上げたのも有って文脈が変なところも多々見られるかもしれません、マジあったらすいません…Ｚｚｚ

？ととと、寝る前に次の予定を…次回のうｐ予定は５／５、６にはあげるのを最速にしたいと思います。遅くても来週の土日には仕上げます。

ではでは、おやすみなさいＺｚｚ

第五章前半　勝負（前書き）

取りあえず寝て起きたらまた続きやるか

第五章前半　勝負

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

俺は自分の分の食事をさっさと終わらせて（パンが一つにスープが少しあっただけだったが）外からでも気配のような物で人の動きが確認出来る場所で食堂から生徒と思われる者達が出てくるのを待っていた。

「しかし、この世界の生き物は虚圏では見てる可能性がありそうな見た目でも現世では見たこと無いようなのも混ざってるな…孔は流石に空いてないか」

中庭には他の生徒達の使い魔らしき生き物達が日の下の元でのんびりしていた。
猫に犬、鳥のような普通のも居れば大きな蛇、昆虫が変化したようなの、果ては目玉が浮いてるだけのようのもいる。その中の一匹、大きな翼を持った蜥蜴のような生き物が近づいてきた。

「…何だ？」

「キュ～…」

「…流石にここでも大きな蜥蜴が相手では言葉が通じたりはしないか」

と、俺が「何やってるんだ俺は」と自分の中で呟くと目の前の大きな蜥蜴は怒ったような表情で抗議？の声を叫んだ。

「キュ！！キュー、キュキュウキュー！！！！！」

「？…言語機能は出来なくても言葉は通じてるのか？おい、お前名は？」

「キュウ？キュキュキューキュウ！」

「…分からん、字は書けたりするのか？」

そう聞くと蜥蜴はおもむろに地面に何かを書き始めた…が

「…すまん、読めん」

考えてみればここは違う世界だったのを失念していた。しかし、ならば何故会話は出来るのだとウルキオラはいつも通りの考えに深く

「キュウ！キュー、キュキュー！！」…浸れなかった。

「何だ？お互いの意思の疎通が出来ない以上話をすることも不可能だぞ、他の所に行け」

そういうとその蜥蜴は残念そう？な顔をしながらどこかへと飛んで行った。

よく分からなかったが、ちょうど良く生徒たちにも動きがあったので俺は先ほどルイズがいたところに行くことにした。

「御主人迎えにきた」

「あら？ちゃんと私の食事が終ったところに来るなんて、やっと使い魔としての自覚が出てきたのかしら？」

御主人は不敵な笑みを浮かべながらそんなことを言ってきた

「どうでも良いが行かなくて良いのか？」

「今から行くのよ。あ、あんたもちゃんと付いてくるのよ」

「分かった、御主人」

その後は特に話すこともなく、ゆったりと歩いて目的の部屋に向かうことになった

部屋に付くと食堂でもそうだったが部屋に入った途端、ルイズは生徒達に嘲笑や罵声を浴びせられた。

それにも彼女はやはり無視を決め込み、自分の席に付いた。（因みに俺も座ろうとすると「あんたは使い魔何だから私の後ろにいなさい」と言われたので従者のようにルイズの後ろに立ちながら控えることにした）

「…良いように言われていたが良いのか？」

「良いのよ、もう慣れたし、言いたい奴には言わせとけば良いのよ」

そうは見えないがな…そう思ったがウルキオラは口に出すことはなかった。食堂の時も思ったがルイズは我慢をしているようだ、嫌ならば嫌と言えば良い、駄目ならば力でねじ伏せれば良い、それが出来なければ喰われるのは自分だった。俺はそうだった…

「（しかし、これは彼女の問題だ、俺が口出す理由は無いな）」

だから俺は何も口に出さなかった。彼女を勇める言葉も、周りを黙らせる威圧も。

しばらくすると一人の女が部屋に入ってきた。

「皆さん、おはようございます…無事に春の使い魔召喚の儀を終えたようでこのシュヴルーズ、皆さんの進級を心から嬉しく思います」

どうやら女はここの先生という奴のようだ、女が周りを見渡し、使い魔を確認していると俺と眼があった。

「ミス・ヴァリエール、随分と変わった使い魔を召喚しましたね？」

「ゼロのルイズ！おまえ、結局使い魔には逃げられたままか～？」

小太りの少年が、あからさまにルイズをからかう様に声を掛ける。すると、周囲からも笑いが沸き起こった。

「誰の使い魔が逃げたのよ、風邪っぴきのマリコルヌ！」

「風邪っぴきだと？俺は“風上”のマリコルヌだ！風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪ひいてるみたいじゃない！うがいでもして来たらどうなの？！」

「（なるほど、確かに…上手い事言うな）」

次第にヒートアップして騒ぎ出す、ルイズとマリコルヌという少年。だが、シュヴルーズが杖を振ると、二人は糸の切れた人形のように、すとんと席に落ちた。

「ミスタ・マリコルヌ、ミス・ヴァリエール。みっともない口論はおやめなさい。お友達を“ゼロ”だの“風邪っぴき”だの呼んではいけません。分かりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ、僕の“風邪っぴき”はただの中傷ですが、ルイズの『ゼロ』は事実です」

周囲から笑いが出る。

シュヴルーズは、厳しい顔で教室を見回し、再度杖を振るうと、未だ笑っている生徒達の口が、赤土の粘土で塞がれた。

「あなたたちは、そのままで授業をお受けなさい」

笑いが静まるのを見て、シュヴルーズもようやく授業を再開した。

先ずはおさらいとして、ハルケギニアの魔法の四代系統の話から始まり、本題の土系統の講義が始まる。

ハルケギニアの魔法は、基本的に四つの属性で『火』『水』『風』『土』に分けられ、これらを一般に四大系統と言う。それに失われた系統『虚無』を合わせて、全部で五つの系統が存在する。

「（なるほどな、つまり魔法とは俺の世界で言う鬼道で、その四つとあるかどうかも分からない一つの合計五つの属性を合わせ持ったものが鬼道の集大成と見ても良いだろうな、あれも縛道や破道と種

類分けがあったしな）」

そして、土系統の魔法の話に移っていった。

「今から皆さんには土系統魔法の基本である『錬金』の魔法を覚えてもらいます。一年生のときにできるようになった人もいるでしょうが基本は大事です。もう一度おさらいすることに致しましょう。では、実際に私が錬金を実演してみましょう」

そう言ってシュヴルーズは懐から、数個の石ころを教卓の上に置き、杖を振った。

すると、石ころは金色の物体に変化した。

「そ、それってゴールドですか！？」

生徒達が驚き、ざわつくなか、机から身を乗り出してキュルケが訪ねる。

「いいえ、真鍮です」

「なぁ～んだ…」

シュヴルーズの答えに、がっかりした様子で椅子に座り直すキュルケ。

「ゴールドを錬金出来るのは、『スクウェア』クラスの土のメイジです。私はただの『トライアングル』メイジですから」

スクウェアトライアングルとは、メイジのレベルを示す言葉である。系統を足せる数によって呼び方が変わり、一系統しか使えない者は

ドット、二系統を足せる者をライン、三系統ならばトライアングル、四系統がスクウェアとなる。

「さて、それでは今度は皆さんの中から、誰かに実際に錬金を行ってもらいましょう」

シュヴルーズは真鍮をしまい、新しい石ころを取り出して、生徒達を見渡す。そして、その視線がルイズに止まった。

「では、ミス・ヴァリエール」

『っ！？！？』

その瞬間、教室内の空気が凍り付く。生徒達は、オロオロしはじめ、困った表情で互いに顔を見合わせる。

「（何だ？さっきの説明通りなら、錬金というものは物質に影響を与えるだけであって、対象物以外には何も害が出ないはずだが…）」

「あ、あの～、先生ぇ」

「何か？」

「その…やめておいた方が…」

「しかし、ミス・ヴァリエールは成績優秀で実技にも真面目に取り組む生徒で…」

「先生は今年から入ったからどれほど危険か知らないんです！ルイズがやるぐらいならアタシが」

「ッ！」

カッチーーン！…

慌てて立ち上がったキュルケの言葉に、ルイズの中でスイッチが入った。

「やります！やらせて下さいッ！！」

ルイズの言葉で、周囲の生徒達から悲鳴が上がる。皆、一様に脅え、机に身を隠す。そんな中、ルイズは席を立ち、教卓に歩いて行く。

そして、ついに教卓の前に立った。

「ルイズ！　やめて！！」

「黙って、気が散るから」

キュルケが生徒を代表するようにルイズに懇願したが、もはや手遅れとばかりに、自分も机に身を隠す。

「（一体何なんだ？）」

「使い魔…じゃなくてウルキオラだったかしら？あんたも机の下に隠れた方が良いわよ」

「…危険」

声のする方を向くと今朝会った女…キュルケと昨日戦った女…タバ

サが机の下から話しかけてきた。どうやら俺の心配をしているようだが、どうやら相当危ないらしい

「忠告は受け取っておくが俺の御主人のことだからな、気になることもあるからこのまま見ている。」

「そう、まぁ、警告はしといたわよ」

そういうと二人は机の下に頭を下げた。…一応霊力で鋼皮の強度を最大にしとくか

そんな様子に不思議そうに眉を顰めながらも、歩いてきたルイズに錬金のアドバイスをするシュヴルーズ。

「良いですか、ミス・ヴァリエール？錬金した金属を強く思い浮かべるのです」

「はい……」

真剣な表情でゆっくりと杖を振り上げるルイズを見て、生徒達は更に怯え出す。

そして、ルイズが石ころを金属に錬金しようと、詠唱をはじめ杖を振り下ろしたその時！

ズガーーーン！！！！！

ｓｉｄｅ　ルイズ

「（はぁ、またやっちゃったわ）」

今私は使い魔のウルキオラと一緒に壊した部屋の掃除をしている、私は無事だった机を空拭きしてウルキオラは机を持ってきたり破片を集めたりしている。

…何よ、何で何も言わないで私の言うこと聞いてるのよ」

「別に聞きたいこともないからな」

「?！な、何で?私の考えてることが分かったの?！」

「…声に出ていたぞ」

「ぁ…そ、そう、それなら良いわ（良くは無いけど）……どうせあんたも私を嗤うんでしょ？　嗤いたければ嗤いなさいよ！魔法学院に入学してから、魔法の成功率ゼロ！付いた二つ名が『ゼロのルイズ』だものね！！」

「嗤う理由もつもりも無いが…敢えて言うならくだらないな」

「な、何ですって！！！！もういっぺん言ってみなさい！吹き飛ばすわよ！？！？！？」

私は杖を抜いてウルキオラに向けた。魔法は貴族に取って強さであり、誇りである。確かに自分は魔法もまともに使えない落ちこぼれよ、それでも本当の貴族になるために努力を忘れないで今まで精いっぱい生きてきた…それを、何も知らない平民の使い魔にくだらないの一言で片づけられるわけにはいかない！

「何故そんなにも他の魔法を成功させるのにやっきになる？お前には既に爆発という力が備わっているんだ、成功はしていなくても失敗はしていない以上、後はそこから自分を停滞させるか成長させるかはお前次第なんだ、お前はここで成功率ゼロなどという周りの雑魚の戯言に踊らされて終わるのか？まぁ、元から期待もしていないからな、それで潰れるのならそのまま潰れろ、俺はその方が気が楽になって良い」

「な？！？！」

私は見た目の興奮に反して冷水を浴びたように頭が冷えるのを感じた。爆発…私は周りと同じ工程を踏んでもいつも爆発という結果になっていたことを嘆いていた。しかしこいつは、私の使い魔はそれを一つの完成した魔法として捕えているようだ、周りの誰もが失望してきた呪文の失敗をだ。

そういった考えが何故浮かばなかったんだろう、よくよく考えれば呪文はどこも間違っていなかったのに、毎回爆発するのは失敗で片づけるよりもよっぽどそういうものとしてとらえた方がしっくりくる。

でも…

「御主人さまに向かって期待してないとか潰れろって何様のつもりよ！！」

「ふん、なら俺と賭け勝負をするか？ルールは簡単だ、お前が俺に俺の御主人として認めさせれば良い、そうすれば俺はお前を主として認め、敬意を持って御主人と呼んでやる」

説明を聞く限りでは期限もないし…

「良いわ、絶っ対あたしのことをあんたに認めさせてやるわ！」

そういって私は教室を出て行った。先へと進むために（ぐぎゅ～）

…先ずは食事が先ね／／／

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

ちっ、普段の俺なら波風立てずに終わらせるのに何故ルイズを励ますようなことをしたんだ？

原因は…この左手の模様だな、しゃべってるときずっと光ってたしな、後で調べてみるか

部屋の修繕が終わり、俺は食堂に来ていた。そこでは多くの人だかりが集まってる場所があったのでそこに行ってみることにした。

その人だかりの中心では気障な男が一人とメイド…シエスタがいた。俺は取りあえずコック長に会うためにもシエスタが仲介してくれないと面倒なことになりそうなので、俺はシエスタを連れていくために前に出た

第五章前半　勝負（後書き）

後編へ続くw

第五章後半　圧倒（前書き）

書いてて思いましたが…一つ一つの場面長すぎでしょうか？自分的には適当に書いて読者の想像に任せるとかってあまり好きじゃないから細かく書こうとしちゃうんですよね（―＿―；）後今回別に分ける必要性なかったな、ちょっと反省です

第五章後半　圧倒

所変わってここは本塔最上階にある学院長室、このトリステイン魔法学院の学院長を務めるオールド・オスマンは、白い口髭と髪を揺らし、退屈を持て余していた。
そして、おもむろに水キセルをふかそうと手に取る。と、同時に部屋の端に設けられた机に座って書類を書いていた秘書のミス・ロングビルが指揮棒の様な杖を振った。すると、水キセルがオスマンの手から浮き上がり、ロングビルの手元に移動する。つまらなそうにオスマンが呟く。

「やれやれ、年寄りの数少ない楽しみを取り上げようというのかね？　ミス・ロングビル」

「あなたの健康管理も秘書である私の仕事です。オールド・オスマン」

訴えをスッパリ切られたオスマン今度は何を思ったのか、立ち上がりロングビルの傍に歩み寄った。

「こう平和な日々が続くとな、時間の過ごし方というものが、何より重要な問題になってくるのじゃよ」

「オールド・オスマン…」

ロングビルは書類から顔を上げず、走らせている羽ペンも止めずに言った。

「もっともらしい事を言いながら、私のお尻を触るのはやめてくだ

さい」

言われた途端オスマンは彼女の尻から手を離し、今度は奇妙なポーズで踊り始める。

「都合が悪くなると、ボケた振りをするのもやめてください」

どこまでも冷静な声で動揺した様子もなくそう言うロングビルに、オスマンは心底つまらなさそうに溜め息を吐いて彼女から離れる。

そこへ何処からともなく、小さなハツカネズミがやってきた。

それを見たオスマンが跪き手の平を差し出すと、ハツカネズミはその上に乗る。

「おお、我が使い魔モートソグニルよ。お前だけじゃな、気を許せる友達は」

モートソグニルと呼ばれたネズミは、オスマンが差し出したナッツを持ちながら、何やら、「ちゅうちゅう」と鳴きだした。オスマンは、それに「ふむふむ」と頷いている。

「そうか、白か。うむ。純白とな」

「／／／ッ！！」

瞬間、顔を赤くしたロングビルがスカートを抑える。

「うーむ、ミス・ロングビルは白より黒が似合うと思うのじゃが、そうは思わぬか？　モートソグニルよ」

「オールド・オスマン。今度やったら、王室に報告します」
顔を引き攣らせているロングビル。しかし、その言葉にオスマンは素早く振り返る。
「たかが下着を覗かれたぐらいでカッカしなさんな！そんな風じゃから、婚期を逃すのじゃ！！」
目を剥いて怒鳴るオスマンには、年寄りとは思えない迫力があった。が、ロングビルの怒りの前には無力だった。
「あた！ごめん！もうしない、ほんと許して！」
ロングビルは、無言でオスマンを蹴り続ける。
下着を覗かれた事、何気に気にしていた事実を言われた事、彼女から、先程までの冷静さは綺麗に消し飛んでいた。
ガタン！
「オールド・オスマン！」
「なんじゃね？」
まるで、何事もなかったかのように闖入者コルベールを迎え入れるオスマン。ロングビルも秘書席で書類の処理を行っている…驚くべき早業である。一方、自分が入る前に行われていたお仕置きの事など露知らず、コルベールは大慌てである。
「たた、大変です！　これを見てください！」

「何じゃ、これは『始祖ブリミルの使い魔たち』ではないか。ま～たこのような古臭い文献など漁りおって、そんな暇があるのならたるんだ貴族達から学費を徴収するうまい手をもっと考えるんじゃよ。ミスタ……なんじゃっけ？」

オスマンは首を傾げた。同時に、コルベールはコケそうになった。

「コルベールです！　お忘れですか！？」

「おお、そうそう。そんな名前じゃったな。君はどうも早口でいかんよ。で、ミスタ・コルトパイソン「コルベールですってば、態とですね、態と何ですね！！」…この書物がどうかしたのかね？」

「（訂正もしないのですか？！）と、とにかくこれも見てください！」

コルベールは、ウルキオラの左手に刻まれたルーンのスケッチを手渡す。それを見た瞬間、オスマンの目が厳しいものに変わる。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

オスマンの言葉にロングビルは静かに立ち上がり、一礼して学院長室を退室した。それを見届けると、オスマンから口を開いた。

「さて、詳しく説明してくれ。ミスタ・コルベール」

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

「うん？何だね君は？」

気障な男がそう聞いてきた、だが俺が用があるのはお前じゃない

「シエスタ、コック長に話は付けておいたか？」

「え？は、はい！」

俺がそう聞くとシエスタは怯えと困惑が合わせ混ざったような顔をして答えた。

「そうか、では行くぞ」

「はい？…あ、ちょ、ウルキオラさん？！」

俺はシエスタの手を掴んで人垣を「ちょっと待ちたまえ！！」…行くことは出来なかったので俺は振り返って呼びとめた気障な男を睨みつけた。

「何だ？」

「今僕は彼女と話していたんだが？それを後から入って連れて行こうとするなんて…いくら教養のない平民とはいえあまりに非常識じゃないかい？」

「知らん、彼女は嫌がっていた素振りをしていたし俺は昼を取りたい、貴様の都合など御主人でもないからそれこそどうでもいい、よって俺はシエスタに厨房まで案内してもらう、それで話は終わりだ」

そう言って俺は再度シエスタの手を引き、その場を「君、そこまで僕を…貴族を馬鹿にしてタダで済むとは思ってはいないだろうね」

離れられなかった、人垣も退く気は無いようだ…面倒だ

「ウ、ウルキオラさん！きき、貴族の方を相手になんていうことを言うのですか？！」

「別に、貴族だか何だか知らないが取るに足らん屑の相手をしたところで時間の無駄だろう」

そういうと、周りは水を打ったように静かになった。

「…貴族の家系をここまで言うとは…良いだろう、どうやら君には一度きつい躾が必要なようだね、この僕、グラモン家が四男、ギーシュ・ド・グラモンの名に掛けて君に決闘を申し込む！！」

杖を突き付けながら気障な男…ギーシュは決闘を挑んできた、周りもそのセリフに湧きあがった「ギーシュ、生意気な平民をやっちまえ！」とか「平民に我らが貴族の威光を見せてやれ！」などという類と罵声で騒がしい

「貴様如きが？良くも吠えるものだな…だが断る、貴様ら如き雑魚を相手にするような趣味は俺にはない」

「何だと！…あぁ、そうかそういえば君はあの“ゼロ”のルイズの使い魔だったね、彼女と同じで口だけは回るようだがそれ以外は無能なんだろ？全く、主人が主人なら使い魔も使い魔のようだね」

「安い挑発だな、そんなものに俺が乗るとでも思ってるのか？」

俺はもう一度人垣の方に体を向けた

「…どけ」

「おいお前、言いたいだけ言ってここを去ろうなんて「俺はどけと言ったんだ…聞こえなかったのか？」？！？！」

俺は先ほどから騒がしい周りの輩にもイラついていたが、何より腹が空いているこの感覚にイライラしていた、虚の時は腹が減るという感覚はなかったし、それに近い霊力切れも周りの雑魚から霊力を得たり、虚圏にいることで空間中にある霊子を取り入れることで問題にすることはなかったが、人間の肉体である所為か空腹の感覚は霊子を取り入れる工程を行っても霊子とは違うものを取り入れるだけで空腹の改善には至らなかった。

で、そんなイラついてる俺は俺の邪魔をする目の前にいる有象無象どもに向けて濃密な殺気を当てて気絶させることにした。案の定ぬるま湯で生活してきたこいつらでは抗うことが出来ずに対象の相手は全員気絶した。

「な、何だ…何をしたんだ君は？！」

「別に、ただ気圧しただけだ、この程度で気絶とはやはり脆弱な奴らだな（人間など、やはり脆弱なだけなのか？…嫌、少なくともあいつは…）で、まだ何かあるのか？」

「？！あ、当たり前だ！何をしたかしらないが、貴族たる僕が君なんかに恐れを抱くわけないだろ！！」

「（今本音が混ざってたな、やはり小物か…だが）解せんな、何故恐怖を抱いているのに俺に挑もうとするんだ？」

「ぐ！た、確かに君が何をして彼らを気絶させたかは分からなかっ

たが、それでも僕は貴族としての誇りを傷つけられた、ここで引くわけにはいかないんだ」

「（その結果自分が命を落とすとは思わないのか？無謀か無知か…少し興味深いな）そうか…気が変わった、貴様に恐怖と力の差を見せてやる」

ｓｉｄｅ　学園長室

時は少し遡り、ここは学院長室…コルベールは、随分興奮した様子で、オスマンに説明していた。

春の使い魔召喚の儀の際、ルイズが召喚した青年ウルキオラ、彼の左手に現れた契約の証したるルーンが気になり、今日までずっと調べていたことを。そして、今日『フェニアのライブラリー』で文献を漁っていたら

「始祖ブリミルの使い魔『ガンダールヴ』に行き着いた、という訳じゃな？」

オスマンは、コルベールが持ってきた古文書の一節と件のルーンのスケッチをじっと睨む。

「そうです！　彼の左手に刻まれたルーンは、伝説の使い魔『ガンダールヴ』に刻まれていたモノとまったく同じです！彼はガンダールヴです！これが大事じゃなくてなんなんですか、オールド・オスマン！」

コルベールは相当に興奮しているらしく、頂点が禿げ上がった頭の汗をハンカチで拭きながらまくし立てた。が、そんなコルベールとは逆にオスマンは厳しい面持ちのまま、重々しく口を開く。

「ふむ、確かにルーンが同じじゃ。という事は、あの青年はガンダールヴになった、ということになるんじゃろうな。じゃが、それだけでそうと決めつけてしまうのは早計ではないかの？」

「…それもそうですな」

オスマンの冷静な意見に、コルベールも熱を下げ、顎に手を当てて頷く。

コンコン

「オールド・オスマン。私です」

双方がどうしたものかと思案しているところ、部屋のドアがノックされドア越しにロングビルの声が掛った。

「なんじゃ？」

「食堂で決闘をしようとしている生徒がいるようで大騒ぎになっています。止めに入った教師がいましたが、生徒達に邪魔されて止められないようです」

ロングビルの報告を聞いて、オスマンは顔を顰める。

「まったく、暇を持て余した貴族ほど、性質の悪い生き物はおらんわい。で、その馬鹿騒ぎをしとるのは何処の誰じゃ？」

「一人はギーシュ・ド・グラモンです」

「あのグラモンとこのバカ息子か。父親も色と武の道では剛の者として通っておったが、息子も輪をかけて女好きじゃ。おおかた女子の取り合いじゃろう。相手は誰じゃ？」

「…それが、生徒ではありません。ミス・ヴァリエールの使い魔の青年のようです」

「「！！」」

ロングビルのその言葉を聞いて、オスマンとコルベールは顔を見合わせた。

「教師達は、決闘を止めるために『眠りの鐘』の使用許可を求めております」

「アホか。そんな事の為に、秘宝を使ってどうするのじゃ。放っておきなさい」

「わかりました」

ロングビルが去っていくのを足音で確認したコルベールが、オスマンを促す。

「…オールド・オスマン」

「うむ」

頷いたオスマンは杖を振る。すると壁にかかった大きな鏡『遠見の鏡』と呼ばれるマジックアイテムに食堂の光景が映し出された。そこではギーシュ・ド・グラモンがミス・ヴァリエールの使い魔の青

年に
首を締めあげられていた。
ｓｉｄｅ　ウルキオラ
「そ、そうか、ならヴェスト（シュン！）な？！は、早「貴様が遅いんだ（ガシッ！）」グゥゥ！？」
ギーシュのそばに一瞬で近づいて首を手で締め上げた。ウルキオラはギーシュの眼を覗き込みながら徐々に殺気を強めていった
「死と隣り合わせの気分はどうだ？もう少し俺が手に力を加えたり、腰にあるこの剣で刺し貫いたら貴様は死ぬ…生き物に等しく与えられる死と言う概念は、貴様らのような何も知らず、のうのうと生きる俗物にもあることだ」
「グ…あ…あ、が…」
ギーシュは眼を見開きながら顔を青くしていく、口元には泡が出てきている。
「これでもまだ、貴族がどうなどと口から出まかせを言うつもりか？」
「……」
ギーシュはもう声も漏らす余裕がなくなったようだ、しかし、その眼にはまだ力が残っていた。
「まだ諦めないのか？…なるほど、面白いな「ちょっと？！アンタ

一体何してるのよ！」…ルイズか」

俺がこの危機的状況でも命を諦めないギーシュについて考えているとルイズが叫びながら近づいてきた。取りあえずこのままでは窒息するのでギーシュの首に掛けた手を離した。

「グ…は……ぁ…」

「何が「…ルイズか」よ！何でギーシュの首をあんたが締めあげてるかって聞いてるのよ！」

「知らん、こいつが勝手に喧嘩を振ってきたから締め上げてやっただけだ（どさっ！）ん？気絶したか」

ギーシュの方を見ると横に倒れこむように気絶していた。

「あああんた！何勝手なことをしてるのよ！しかも周りの人間まで何人か気絶してるし…どういうことか説明しなさい、そこのメイド！」

そういって俺ではなく隣にいたシエスタに話を振った。どうやら俺に振ってもまともな返答をしないと分かったようだ。

「え？え～っと…私が貴族の方の不敬を働いてしまい、困ってるところをウルキオラさんが助けてくれたんですが…ちょっとやりすぎな気がします（冷や汗）」

「殺してないだけマシだ」

「…へ、へえぇ、あんたって結構強かったのね…じゃなくて！どう

すんのよこの事態！！」

ルイズが周りを見て言った。周りを見るとまさに死屍累々…かなりの人数が気絶していた。

「…知らん、勝手にそのうち起きるだろう、それよりシエスタ、早くコック長の所に案内してくれ」

「はい、わ…分かりました」

「ちょっと！あんた起こすなり保険室連れてくなりどうにかしなさいよ！」

俺はその言葉を無視して厨房の方に向かうのであった。

遠見の鏡で事の一部始終を見ていたオスマンとコルベールは、騒動が終了したと見、再び顔を見合わせていた。

「オールド・オスマン…勝ってしまいましたね」

「うむ、しかもまるで勝負にならんかったの。」

「ええ。彼は物腰一つとっても隙がありませんでしたし、相当の修羅場を潜り抜けてきた強者だろうとは私も思っていましたが…」

「う～む」

コルベールもオスマンも判断に困っていた。ウルキオラが相当の実

力者なのは安易に予測できるがそれがどの程度なのかもわからなかったし何より…

「武器…使いませんでしたね」

「うぬ、ガンダールヴはあらゆる武器を使いこなす始祖ブリミルの使い魔…なのにあの青年は持っている武器を使うまでもなく終わらせてしまったからのう」

「どうしますかオールド・オスマン…王室に報告しますか？」

「それはいかん」

コルベールの提案を、オスマンは重々しく首を横に振って否決した。

「どうしてです？」

「ミスタ・コルベール。ガンダールヴはただの使い魔ではない」

「はい、始祖ブリミルの用いた伝説の四体の使い魔の一角ガンダールヴ。その姿形は記述がありませんが、主人の呪文詠唱の時間を守るために特化した存在と伝え聞きます」

「そうじゃ。始祖ブリミルは、詠唱を行う時間が長かった、その魔法が強大であるが故にな。知っての通り、詠唱中のメイジは無力じゃ。そんな無力な間己の身を守るために始祖ブリミルが用いた使い魔がガンダールヴじゃ。その強さは」

「千人もの軍隊を一人で壊滅させるほどの力を持ち、あまつさえ並のメイジでは全く歯が立たなかったとか」

「うむ…ところで、ミスタ・コルベール。あの青年は、間違いなく『人間』だったのかね？」

「はい。ミス・ヴァリエールが呼び出した際に念の為ディテクト・マジックで確認しましたが、正真正銘の人間でした」

「まあ、あの殺気だけで相手を気絶させた気圧やグラモンに急接近した時の速度を鑑みるにただの人間ではなさそうじゃがのう、わしら二人でもぁの速度を全く感知できなかった位じゃ…まあ、それはさておきミスタ・コルベール。君に尋ねるが、まだ仮定とはいえあの青年を現代のガンダールヴにしたのは誰じゃったかね？」

「ミス・ヴァリエールですが…」

「うむ、そうじゃな。ではもう一つ、彼女は優秀なメイジじゃったかの？」

「いえ、その…努力家であり、勉強熱心ではあるのですが…優秀とはちょっと……」

多少、言いづらそうにしているコルベール。彼としては、自分の教え子を『無能』呼ばわりすることに抵抗を感じるらしい。

「って、それはオールド・オスマンもご存知の筈では？」

「うむ…まあのぅ。それはさて置き、ここまでの話で謎が二つある。どう考えても“優秀”とは言えんはずのメイジと契約した“人間の青年”が、何故ガンダールヴになったのか…全く謎じゃ。理由が見えん」

コルベールも神妙な顔で頷く。

「ここは、もう少し様子を見た方がええじゃろう。下手に王室に報せてあそこのボンクラ共がガンダールヴとその主人を求めたらどうなると思う？阿呆共がまたぞろ戦でも引き起こすに決まっておるわい。宮廷で暇を持て余している連中は、ほとほと戦が好きじゃからな」

やれやれと肩を竦めながら、オスマンは皮肉たっぷりに宮廷の貴族たちを批判する。しかし、コルベールも同感の様子だった。

「ははあ。学院長の深謀には恐れ入ります」

「この件は私が預かる。他言は無用じゃ」

「はい、かしこまりました！」

コルベールは力強く返事をすると、一礼して学院長室を後にした。オスマンは杖を握ると、窓際へ向かい遥か遠い歴史の彼方へ想いを馳せる。

「伝説の使い魔ガンダールヴ…一体どのような姿をしておったのだろうなぁ」

文献には、ガンダールヴはあらゆる武器を使いこなし、敵と対峙したとある。オスマンはそれを思い出し「腕と手はあったのじゃろうな」と再び呟く。だが、オスマンの呟きに答える者は、誰もいなかった

第五章後半　圧倒（後書き）

はい、ギーシュとの決闘イベントは挑発に乗ること無くその場で終わらせてしまいました。ウルキオラが来いという命令に自分を呼んだ奴でも無いのに聞くとはどうしても思えないのでこのような結果になりました（＾＾ゞ

次の更新は恐らく遅くなります、予定では来週には載せたいですがそれが無理だと５／２９辺りになります（―｜―；）取りあえず最速予定は来週の５／１５、１６です

第六章　食事（前書き）

卒論やっと決まって後は実験して纏められれば完ぺき何だけど…大丈夫かな、時間がないぜ（；｜；）自分が後二人欲しいです←←←

第六章　食事

ｓｉｄｅ　ルイズ

「で？あんた何したのよ？見てたわよ、あんたの周りにいる奴らを一瞬で気絶させてたけど…あんたはても使ってなかったわよね？」

「ただ睨んだだけだ、他にこれと言ったことはしていない」

「そんなわけないでしょうが！ただ睨んだだけで気絶するならあんた今気絶してるわよ！！」

私は当初、この使い魔を呼んだ時はただの世間を知らない平民程度にしか思っていなかったけど、先の決闘紛いの戦いを見るにはただのではないみたいね、何しろ睨むだけで周りの人を気絶させ、ギーシュを掴み上げた時の雰囲気は常人が放てる気配…とでも言えばいいのかしら？そんな何か異質なものを持っていた。

平民でも貴族でもない空気を持った使い魔…一体私の使い魔は何なのかしら？しっかり把握しておくのも御主人さまとしては当然の行為よねってことで確認しようとしてるのは良いけど…

「知らん、勝手に立ち眩みにでもあったのではないか？」

「そんなわけあるはずないでしょうがーーー！！！」

こんな感じではぐらかされてしまう

「大体喧嘩を振ってきたのは向こうの方だ、何も問題はないだろうが」

「どこがよ！最初に問題が起きてたのはそのメイドが原因だったでしょうが！それをあんたが遠慮もせずに横から強引に連れていこうとしたからあんな騒動になったんでしょうが！！！」

そういって私は厨房に案内しているメイドを指差した。

さっきの時にこいつがギーシュとメイドの話を少し待てば良いだけだというのに、横から話しかけたりするからあんな騒動になったんだから！

「シエスタに厨房の案内を頼んでおいたのは俺の方が先だ、だから問題はな「大有りよ！！」い…何故だ？シエスタは喧嘩を売られて困っていた、俺は厨房に行けなくて困る、ならば障害になる物を排除しても問題はあるまい？」

そう言ってウルキオラはシエスタの方を向いた。

「え？わ、私に言っているのですか？」

「当然だ、じゃなければそちらを見て話したりなどしないだろ？」

「だ！か！ら！？貴族に手を上げることが不味いって言ってるでしょうが！それと、話すなら私の方見て話しなさいよ！！」

私は乗馬用の鞭でウルキオラの頭を叩いた。が、あまり（見た目的には全く）効いていないようだ

「どうした？そんなものを取りだして？」

「ッッ～？！？！あ、あんた痛くないわけ？！」

私は痛みで悶絶するウルキオラを想像していたがウルキオラは蚊にでも刺されたか？程度の平気な顔でいた

「別に痛くなどないが？それでシエスタ、あの時横から割り込んだのは迷惑だったか？」

「い、いいえそんな！滅相もないです！先ほどは危ないところをありがとうございました、あのままでは先ほどの貴族様に何をされていたか分からなかったので…でも拾った私がいけなかったのも事実ですし…私があの時もっと空気を読めていればあそこまで拗れることには」

「その辺りのことは知らないな、親切して後悔するかしないで後悔するかの違いではないのか？その時自分の思い通りに動いて後悔がないのならこれからも続ければ良いし、後悔しているのなら次はしなければ良い、それだけの話だろう？」

「ぁ…そ、そうですよね、自分に後悔がなければそれで良いですよね、少なくとも親切にしたことには後悔がありません」

「なら悩む必要性もないな、もう答えは出ているんだからその通りにすれば良い…だが、毎回俺が助けられるとは思うなよ、いない時は自分でどうにかするんだな」

「はい、ありがとうございます！」

…な、何よこいつ、私の時と違って随分と優しげに話すじゃない、それってつまり自分がそばにいる時は助けてやるって遠まわしに言ってるってことじゃないのかしら？（怒）

「ちょっと！何勝手に仲良く話してるのよ！あんたは私の使い魔何だから他の人間と勝手に話なんかしてるんじゃないわよ！」

「御主人…それは無茶だ」

「無茶でも御主人様の命令なんだからちゃんと聞きなさ～い！！」

そんな取りとめもなく、不毛な会話もシエスタの「着きましたよ、ここが厨房です」の言葉で幕を引いた…部屋に戻ったら覚えときなさいよ

ｓｉｄｅ　ウルキオラ

やっと着いたか、何故だか戦いの空気に触れているより疲れた気がするが…これが人間で言う気疲れという奴か？破面の時はこんなことがなかったのに、全く人間の肉体とは面倒なものだな

「おう！おまえが貴族のガキ共からシエスタを助けてくれたって坊主か？」

厨房の奥から恰幅の良い中年の男が現れた。こいつがコック長か…

「あんたがこの厨房を仕切ってる人か？」

「おうよ、俺のことはマルトーって呼んでくれや、にしてもその若さでよくあの高慢な貴族共を圧倒できるもんだな！しかも聞いた話じゃメイジでもなく、腰に剣を刺してるのに素手だけで何人もの貴族を怪我人も出さずに鎮圧したそうじゃねぇか！？全く大した腕の持ち主だぜ！…を？」

そう言ってマルトーは俺の背中を叩こうとしてきたが俺はそれを避けて距離を取った

「何のつもりだ？」

「何だよ、つれねぇぜ我らがケンよぉ」

「何で俺の背中を叩こうとｓ…待て、何だ、その我らがケンとは？」

「おめぇさんは貴族相手に素手で倒したって言うから最初は拳《こぶし》って読んで我らが拳って呼ぼうと思ったんだが、実物を見れば本領は剣士みてぇだから剣《つるぎ》の意味も込めて我らがケンって呼ぶようにしたのよ、どうだい？わりと洒落てるだろ？」

そういうとマルトーは、まるで子供のような笑顔を向けて俺に笑いかけてきた。…しかし、俺が聞いたのはそういう意味で聞いたのではない

「違う、何故俺が貴様らの剣にならねばならないんだ？

「あん？何だ、我らがケンは随分お堅い頭にようだな？そりゃあ俺達力ない平民の希望の星だからに決まってるじゃねぇか！」

マルトーの後ろにいるシエスタや他のコック、メイド共もこっちを見て、丸で英雄か何かを見るような眼でこっちを見ている…何だ？この胸の辺りがちりちりする感覚は？…やはり人間など群れなければ、自分よりも力ある物に練らなければ生きていけない生物と言うことを体が知らしているのだろうか？しかしそれにしては…いや、今はそんなことを考えるより食事だな

「取りあえずコック長「おう！何だ、我らがケンよ？」何か作ってくれ、腹が減ったらしいのでな、何か食べたい」

「あん？何か変な言い回しだが…まぁ良い、最高に美味い飯を作ってやるよ！」

マルトーはがっはっはっという感じの笑い声を上げながら厨房の奥にいった

「ところで御主人、いつまで俺のそばにいるんだ？もう授業とかじゃないのか？」

「どうせあんたが騒ぎを起こしたせいで、今頃大食堂の方では先生方が大騒ぎしてるでしょうからね、誰か先生が来たときに説明するためにも、一応今日はあんたに付いてるわ」

「そうか、わかt「ダーリン！ここに居たのね！？」…騒がしいな、それにだーりん？紅茶か何かの名か？」

騒がしく入ってきたのは今朝会ったキュルケという女とその付き添いのように付いてきた昨日の夜に会った少女、タバサであった

「それはダージリンよ！…ってキュルケ？！あんた何しに来たのよ！いえ、それよりもダーリンってどういうことよ！」

「あら？言わないと分からないかしら？何しろメイジに囲まれて顔色一つ変えずに多くのメイジを気絶させる平民なんてまずいないし、何よりその時の静かな立ち居振る舞いといったら、下手な貴族なんかよりもよっぽど貴族らしかったし…私はそんなあなたを見て痺れ

たの、恋したの！情熱なのよ！！」

途中まではルイズと会話するように話をしていたが、徐々に俺の方に顔を向けて語りだした。

「良く分からん…御主人、取りあえず分かるように俺にも説明してくれ」

「はぁ？説明って…まぁ良いわ、知らなくても良い事だから忘れなさい」

「あぁん、そんなそっけないところも魅力的よダーリン！」

俺は付き合ってられないとその旨を伝えようとしたら、タイミング良くシエスタが食事を持ってきた

「ウルキオラさん、お食事をお持ちしました」

「キュルケ、俺は食事をするからしばらく話しかけるな」

「えぇ、分かったわ、それじゃあねダーリン！」

そういうとキュルケは俺に向かって何かを飛ばすような動作（投げキッス）をし、タバサもそれに合わせてお辞儀をしてから部屋を去って行った。

「何なんだ一体？」

「気にしなくて良いわよ、それよりご飯食べれば？」

「そうだな」

俺はそういうと目の前にある料理物を片づけることにした。味は予想通り美味く出来あがっていた。

しばらくのあいだ料理に専念していると、入口の方から生徒にしては年を行っている者が数人こちらに向かってやってきた。

「せ、先生方！な、何でしょうか？！」

「ルイズ君か、君は良いから下がっていなさい、我々はそこの君が呼んだ使い魔に用があるのだ」

「別に構わんが、今は御覧のように食事をしている、用ならその後に聞くから少し待て」

「そうか、やはり実力行使しかないようだな」

しかし、教師共は言葉が通じていないかのように、みな懐から杖を取りだして何やらを唱えだした。

「ミ、ミスタ・ギトー！こいつは後で私が責任持って連れて行きますんでここは杖を収めてください！」

「そういうわけにはいかん、使い魔とはいえ、ただの平民が貴族の御子息たちに手を上げて置いて何のおとがめも無しというわけにもいかない、貴族の誇りのためにも今すぐにこいつには何かしらの処置が必要だ」

「で、でもこいつはこんなのでも私の使い魔なんです！」

「安心なさい、例え魔法も使えない劣等生たる君の使い魔だからって殺したりすることはない、ただ自分が犯した罪を分からせるだけだ」

そう言い終わるとギトーと呼ばれた教師は俺に向かって杖を向けてきた。

『エア・ハンマー！』

「？！」

俺は避けても良かったが、避けたら厨房の中に直撃するコースだったので、腕でガードすることにした、ダメージは皆無だったが、椅子に座ったままだったので魔法を食らった勢いのまま厨房まで吹き飛んだ

「ウルキオラ！」

「ウルキオラさん！」

「ふん、これで少しは懲りたかね？全く平民風情が…」

「せ、先生！もう十分あいつも貴族に敵わないってことは分かったでしょうしここは」

…面倒だが殺すと周りが五月蠅そうだな、無力化する位にとどめておいてやる。そんな考えをしながら俺は立ちあがった

「ほう？あれを食らってまだ立ち上がるか、ならｂ「煩い」…どうやら反省はしていないようだな」

そういうと今度は他の先生共も各々の得意呪文らしき物を唱えだした。

ルイズが何かを叫んでいるが…今は人の食事の邪魔した奴らを蹴散らす方が先だ

「ウィンd「遅すぎる」…な？」

奴らの目には俺が消えたようにでも見えたろう、俺は奴らが詠唱などに気を取られている間に懐に入り、刀を抜いて杖を四分割に切り捨てた。

「失せろ、殺すぞ」

「き、貴様！我々にこn「聞こえなかったのか？俺は失せろといったんだ」…く！」

ギトーと呼ばれた教師はとても悔しげな顔をした後、他の教師と共に部屋を後にしていった

「無粋な奴らd「あああああんた一体なんてことが出来てしちゃってるのよ？！？！」…取りあえず落ち着け御主人、色々セリフが混ざってて何が言いたいか分からん」

「うるさい！あ、あんたよりによってミスタ・ギトー先生達の杖を切っちゃって…あんたって、あんたって奴は！」

「人の話を聞けもしないあいつらに比べれば遥かにマシだと思うが」

「そこじゃないわよ！あ～…次の授業からどんな顔して先生たちに

会えばいいのよ、まぁ確かに人の話聞かない先生たちも悪いけど」

「ウルキオラさん、けがとか大丈夫ですか？！」

「頑丈だからな、問題ない」

「…って人の話聞きなさいよ！」

「聞いている、ようは次に会うのが嫌なだけだろ、だがそんなのは御主人の問題であって俺は気にならない」

「人ごとだと思って…」

俺は御主人の愚痴を無視して再び食事を再開しようとしたが、他に気配を感じたのでそっちの方にも意識を向けた。

「おい、そこのドアの後ろに隠れてるやつ、出てこい」

そういうとドアからはコッパゲが現れた

「ミ、ミスタ・コルベール！さ、先ほどのは」

「あぁ、大丈夫ですよ、先ほどの会話はちゃんと聞いておりましたので食事を終えてから私が学園長のおられる場所にご案内しますんで」

「そうか、助かる」

そういった後、食事を再開し、食べ終えた後はコルベールの案内で学園長の元に向かうのであった

第六章　食事（後書き）

今日明日も忙しい…ホント、眠いです（ＴｏＴ）／～～～
というわけで少し急ピッチで仕上げたのですが今回はギャグ性の物にしたので細かいところは気にしない方向でお願いします。←←←
次回は来週の６／５，６／６位を目安にします

余談ですが書いてる時は少しでもテンション上げるために大好きな恋色マスパを聞きながらやってます、魔理沙可愛いです（＊＾＿＾＊）

第七章　対話（前書き）

実家に帰ってて遅れました（―――；）

第七章　対話

ｓｉｄｅ　ルイズ

ウルキオラが食事をし終わった後、私たちはコルベール先生に付いて行って学園長の部屋に向かっている。
正直私は緊張していた、先ほどの食堂と厨房での件で私の使い魔が処罰を受けたり、最悪貴族に手を出したことで手打ちにされるのではないかと…なのにこいつときたら、全く心配というか緊張と言うか、そういった情緒をどこかしらに忘れてきてしまっているようだ。
確かにさっきのギトー先生との争いでエア・ハンマーを受けても怪我らしい怪我はしてないけど、だからって他の魔法、ウィンディ・アイシクルやファイア・ボールみたいな殺傷能力の高い魔法を受けても平気かどうかなんて分からないのに…あれ？でもそれにしたって…

「ねぇあんた、そういえばさっきエア・ハンマーで吹き飛ばされたのに何でかすり傷の一つもしてないのよ？」

そう、普通の人間なら転んで膝を擦る、ただそれだけでも皮膚を傷つけて血がそこから出るのは常識だ、なのにこいつは厨房の中まで吹き飛ぶほどの威力を受けながら、骨どころか皮膚にさえ傷がない

「さぁな、当たり所が良かったか…受け身を取ったからか…別に構わんだろ？怪我がないのだから」

「そういうわけにもいかないでしょ？！あんたが何かしてない限りあの威力でかすり傷も出来てないだなんておかしいじゃない！…そ

れとも何？ご主人様たる私にも言えないような訳でもあるの？」
私がそう叫ぶと前を歩いていたコルベール先生が立ち止り、こちらに振り向いた。
やば、煩くし過ぎたかも…
「ふむ、確かに私も気にはなっていたのですよ、後ろで隠れていた様子を見てたとはいえ、あの威力で服に埃がつくだけなど…何ともおかしな話ですな」
ほっ良かった、私が騒がしかったわけじゃなかったみたい…でも先生も話の内容が気になってたみたい
「…分かった、言わねば納得してくれないようだな、しかし、それについてもその学園長とやらの部屋では駄目か？二度の説明になりそうだから面倒だ」
「分かりました。ではもうすぐ付きますので、その時にお願いします」
そう言うとまた歩き始めた。…やっぱり何か隠してたのね、ま、ただの生意気な使い魔じゃなくて良かったわ、これで何かあっても戦いに使えるって確信が出来そうで安心だわ
ｓｉｄｅ　ウルキオラ
コルベールがある部屋の前で止まった、どうやらこの部屋が学園長とやらの部屋らしい。
「オールド・オスマン、例の青年を連れてきました」

「うむ、御苦労じゃったな、入りなさい」

コルベールはその返事に「失礼します」と言いながら中に入って行った。

俺とルイズもコルベールの後に続いて、部屋の中に入って行った（ルイズは失礼しますと言ったが俺は必要ないだろうと言わなかった）

中に入ると、そこには幾年を重ねた老人がいた、しかし、その眼に宿る光にはただの老人にしては幾許に物騒な光が灯っていた

「（こいつ、なかなかの眼をしているが…所詮は人間レベル、これ位なら副官（フランシオン）級の方がよっぽど殺気があるな）それで、俺に何のようだ爺？」

「ちょちょ、あんた学園長に向かってなんて口聞いてるのよ！」

「ふむ、君は目上の人物相手への口の聞き方を知らぬようじゃな？」

「生憎貴様程度の人間風情に持ち合わせるようなちゃちな口など持ち合わせていないのでな」

そういうと学園長と呼ばれる人間の眼には先ほどの剣呑な視線はなりを潜めて、代わりにこちらを差し計るような視線になった

「まぁええわい、どの道お主は貴族に手を出したんじゃから死刑は免れん、精々独房の中で反省するが良い」

「オ、オールド・オスマン！こいつには後でキッッッツイ刑罰を私から与えておきますのでどうか「ミス・ヴァリエール、君はちと黙

っておいてくれんかね？」？！？！も、申し訳ありませんでした…」

そういうとルイズは黙り込んでしまった…しかし、俺を殺すと宣言するわりには視線がこちらを探るように見つめるのはおかしい…なるほど、さっきの殺気じみたセリフと視線はフェイクで、本命は俺を探ることか…気に食わんな

「さて、ではコルベーｒ？！？！」

俺はオスマンの首に刀を押しあてようとしたが（殺すつもりはないので首の皮一枚で止めるつもりだったが）オスマンはその速度に反応して刀を弾いた

「ウルキオラ！あんた何を…」

「オールド・オスマン！？」

「ほっほっほ…いやいや危なかったわい、危うく殺されるところだったわい（び、びびったわい、マジ冷や汗ものじゃったわい（汗））」

「ちっ、殺すつもりもなかったがまさか反応されるとは思わなかった（まぁ反応できるかもしれないギリギリの範囲で振ったからな、はじけて当然だが…やはりこの爺、ただの爺じゃないな）」

先ほどの斬撃は元の世界にいた雑魚死神程度なら大抵は反応できない位の剣速しか出してなかったが、まさかこの世界の人間の…しかも老人が反応できるとｈ（ドバシィ！！）…

「何だ御主人、人の頭に向かって花瓶を投げるなんて…育ちが疑われるぞ？」

「うるさいって言ってんでしょ！あんたよりにもよってオールド・オスマン！に…この学園の長に向かってどういうことしたか分かってるわけ？！」

「知らん、それに先に試そうとしたのは向こうの方だ、俺も試して何が悪い？」

「だからって…て試す？何が？」

「学園長は俺に死刑ということを告げて俺の動揺や行動を見ようとしたみたいだが、俺はそんなた茶番に乗るつもりは無い、だからこっちも試してやろうとしただけだ」

ルイズは鳩が豆鉄砲を受けたような顔をした

「すまんかったのう、ちぃとお前さんのことを調べてみようと思っただけじゃったのだがのう、貴族たちの暴走はわしがこっそり処理しておくでな、勘弁しとくれ…じゃからその物騒な気は止めとくれ、寿命がちりちりと削れそうじゃわい」

俺は仕方なくだが、オスマンのみに向けている殺気を収めた

「ふぅ、しかし君は何者じゃ？さっきの動きと良い考え方と良い、そこいらに居る平民にも、ましてや貴族にも似ていないのを見ると見当がつかん、お主はまるで…」

「ここと違う世界から来た…か？」

「うむ、まさにその通りじゃ」

この老人、予想通り相当能力は高いようだ、頭の回転も悪くないし…色々と役に立ちそうだ

「取りあえず先の無礼はお互いに水に流そう、すまなかったな」

「何言ってるのよ、あんたは剣を向けたんだからしっかりと謝んなさいよ」

「ほ？いやいや、わしも不躾にお前さんを試そうとしたからのう、水に流すなら言いっこ無しじゃわい」

「だ、そうだが？」

「グ…ぬぬぬぬ！」

何か言いた気だが、オスマンが許したからか、無駄に口を出せないようだ

「さて、俺の話だったな」

ｓｉｄｅ　ルイズ

ウルキオラの話はまるで御伽の様に現実味のない話だった。
死神、虚、破面、黒崎一護、藍染惣右介、そして自分のこと等と、何とも言えない話だったが、その場の真剣な空気に話すことが出来なかったけど、ウルキオラが真面目に自分のことを語っていることだけは分かった。

「なるほど…つまり君はこちらで言うところの魔法衛士隊の隊長の

一人で藍染という人物が王、そして死神が敵だったという解釈で良いのかな？」

「その魔法衛士隊が何かは分からないが他は概ねそんなところだな」

でもやっぱり信じられない位御伽な話ね、第一そんなこと言われたって私たちが確認する方法なんて一つもないし何よりその話を信じるなら私たちの国なんて…いえ、この大陸全土が一丸になっても倒すことなんて不可能じゃない？！

「あんたでたらめ言ってんじゃないでしょうねぇ？」

「まさか、嘘を言う位なら黙ってる、これは話しておいて俺の重要度、危険度を熟知して貰っておいて今後の待遇、先ほどの騒動のこととこちらに有利に運べるようにしているだけだ…そうだな、試しに先ほど言った鋼皮について見せてやろう、何か殺傷能力の高い攻撃を放ってみろ」

ウルキオラは学園長に向かって挑発した…ってこいつはまた…はぁ、何だかもう疲れたしほっとこう、どうせまた無事なんでしょうし

「ふむ、怪我をするかも知れんぞ？」

「大丈夫だ、気にせずやれ」

「やれやれ、もう少し老体を労らんかい…ウィンディ・アイシクル」

学園長が呪文を唱えると空中に氷の槍が出来上がり、それをウルキオラの方に飛ばした。

槍は予想通り、ウルキオラの腕に当たるが、皮膚に当たっているだ

けで、それ以上刺さることはなく、ウルキオラが腕を振ると槍は音を立てて砕けた。

「このように霊力を纏うと皮膚の硬質化を行うことが出来る、しかし、この世界では何故か霊力とも違う何かを取り込んでそれを行使しているようだがな」

「なるほどのう…君がただの人間じゃないのは分かったが、何故今は人間になっているかは分かるかね？」

「さぁな、俺にも何故ここに呼ばれたかの途中の記憶は無く、文字通り途中からの記憶が抜け落ちてるんだ、説明のしようがない」

「ふむ、では今の話も含めてで何じゃが…君はこれからどうするつもりなのじゃね？」

そういうと学園長はまた鋭い目つきでウルキオラを見つめた…が、ウルキオラは似合わず、それでいてぎこちない笑みを向けて

「別に何も、敢えて言うなら心に付いてもうしばらく触れて…知りたいな」

「ほ？」

「へ？」

学園長は拍子抜けしたような安心したようなおかしな顔つきになる。かくいう私も変な顔をしてしまっているだろう

「俺は心というものが理解できなかった、理解したくて頭蓋を割り、手にしたくてさまざまな者の心臓を取りだしたことも一時期にあっ

た…しかし、それでも望む答えは得られなかったが、こちらに来る前、最後に戦って俺を倒した男…黒崎との戦いでその片鱗が少しだけ見えた」

ウルキオラは右手をグッと握り、そして力を抜いた

「だから俺は、もうしばらく貴様ら人間と共に生きるということを学ぼうと思っただけだ、同じ人間としてな」

その時のウルキオラの顔は儚げで、優しげで…多分そう語るウルキオラの顔を私は一生忘れられないと思った

「…あい分かった！お前さんがどういった人物かはようわかった、まぁ今までの行動を見る限りでも自分から乱暴を奮うタイプでもないようじゃしな、お主と貴族のボンクラどもや生徒には厳重注意ということにしておこうかのう」

「あ…が、学園長、それでは御咎めは？」

「うむ、話の内容次第ではわしも拘束ぐらいはしとくつもりじゃったがその心配もないようじゃからな、大丈夫じゃろうて」

「あ、ありがとうございm「ならもう用はないな、いくぞ御主人」てあ！ちょっと、待ちなさいよ！」

私は一度お辞儀をしてから退出し、ウルキオラを追いかけた、やっぱり一度躾した方が良いようね！

そうしてルイズは馬用の鞭を持ちながら間違った方向に思考を飛ばすが、彼に鞭が聞かないことを思い出すのは追いついてウルキオラに鞭を振りおろした後だった。

ｓｉｄｅ　オスマン

やれやれ、慌ただしいのうミス・ヴァリエールはもう少し慎ましさを「よろしかったのですか？」

「おぉ、まだおったのかい…コルニット君？」

「あの青年の力は誇大し過ぎています、彼がその気になればこの国一つくらい気分次第でどうにでも出来ますよ？後、私はコルベールです」

「だからと言って死刑にするのも困難じゃし拘束しようにもすぐに返り討ちにあうんがオチじゃぞベルモール君」

「確かにそうですが…それと、私はコルベールです」

「それにじゃ、わしはまだあの青年は白痴と何も変わりないと思っておるのじゃ、これから正しい道に導いてやれば人間として、人間らしさを持って生きていけるじゃろう、何せ肉体があって意思疎通が出来るのじゃからなぁ」

そう、どんなに力があろうともあの子はまるで生まれたての子供のように純粋で知らないことで溢れているんだろう、ならばわしらが教えて導いてやれば良いだけの話じゃ、それが老い先短い爺の出来る仕事じゃろうて

「あぁ、なるほど、そういうことでしたら、微力ながら私もお手伝いしますぞ」

「そうか、期待しとるぞ……コルベール君」

「分かりました（最後、ぽい名前が思いつかなかっただけだなこのエロくそ爺が）」

第七章　対話（後書き）

実家帰ってたら投稿遅くなりました、申し訳m（__）m
今回からウルキオラのオリジナルですが過去に触れるという
要素とフラグ上げみたいなことが出来ました、このために予定より
2話ほど余分なのが入った気がしますが…気にしない！（ドドーン
！）
まぁ冗談はさて置いて…次回はちょっと遅くなる可能性が高いです、
早くて今週って感じは変わりませんが遅いと今月末か来月の頭にな
りそうです、遅くなった場合は申し訳ですm（__）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9461k/

呼ばれしは『虚無』を冠する使い魔

2010年10月10日13時42分発行